

花をも恥らう白き花 コ  
ジマに愛されし黒き騎  
士

人類種の天敵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なあ、俺たちつて随分と平和な世界で生きてるらしいぜ。え、実感わかない？そりや  
俺も。まあ、そんな俺だからこそ語れるのかもな？あの世界とは全く正反対の、誰もが  
生きるために戦つてる世界をさ。知つてた？あ、知らない？俺つてば、一流の悲劇より  
三流の喜劇が好きでね。たつた一人のイレギュラーのせいで、悲劇に成り得ない喜劇が  
在つても、いいと思うんだよね  
(××××年×月×日――の――)

# 目 次

プロローグ	—								
目覚め	—								
白い巨人	—								
クソジジイと天使リリウム	—								
独立組織 セレン組アジト	—								
ネクストやつてみよう	—								
セレンの思惑	—								
リンクス管理機構 カラード	—	77	62	47	31	20	11	5	1
カラードランク11のゴミ虫とランカー 戦？いーいじやん！いーいじやん！	—								

ラインアーツ襲撃？

106



# プロローグ

特に普通な人生

両親は普通のサラリーマンと専業主婦  
地元の幼稚園・小学校・中学校へ通い

野球で甲子園に行つたーとか、サッカーで優勝したーとか、そういう歴史があるわけでも、ましてや学校偏差値が全国上位つてわけでもない。いたつて平凡な……よく言えば結構古くから建てられてるのが取り柄の高等学校に入学し、今高校一年生の俺

部活に入つて汗を垂らして青春を謳歌するわけでも、「いらっしゃいませー」と、営業スマイル全開の愛想笑いをしながら顔も声も知らない赤の他人を神様だなんだと崇めたて祭るわけでもなく

ただ、普通に生きてきた

「おーい、今日はどうすんだー?」

「はあ? 帰つてゲームに決まつてんだろー」

「ガンダム?」

「アーマドコア」

「おけおけ、んじやまた明日ー」

「おー、お疲れー」

自転車をシャカシャカとこいで歩道の信号機が赤だつたら渡らない、とか。緑になるとまでスマホを弄つて緑になつたらポケットに突つ込んでハンドルを握る

「あー……退屈だー……」

「——平凡——。その二文字だけで言い表せられる俺の人生に、俺自身が苦笑する

——お前、生きてて楽しい?——と

「はは、さつさと帰つてペダルを漕ぐ……と、目の前に、黒いワンピースを着た女性がいた

……?

「俺を見……てる……?」

その女性と見つめあつた俺は、横から迫る耳を閉ざしたくなるような耳ざわりな音に気付けなかつた

——俺は死んだー

多分、あの女性を見てなくとも俺はペダルを漕がなかつたと思う。無駄だろうと判断したからだ

——ああ、俺は死ぬのか。ああ、死んだ——

それだけを思つて轢かれて行つたと思う。身体がグチャグチャになつて

——そして俺は目を覚ます——

至つて平和で、至つて平凡な人生を送れる……送れた筈のあの世界とは正反対の生きる残るために。誰もが生きるために戦つている世界へ

「おい、貴様は何者だ。どこから来た？私はもうリンクスは辞めた。また連れ戻しに来たのか？」

「いや、その前にここどこよ……いや、私は誰？とは言わないけどさ。俺は確か車に轢かれたくね？」

「お前…………頭は大丈夫か…………？」

「いや…………全然！？てか…………なんで近寄つてくれないんでせう？」

「お前の近くにコジマ粒子が漂つてるからだッ！！しかも大量に！高濃度の奴がッ！」  
「ええー！？コジマ粒子つて綺麗じやん。体に悪いわけねーじやん。あんたバカア？」

「ほう、貴様。死にたいようだな？いいだろう。そこまで言うなら長く苦しめて殺して

やろう」

「ちょ!? 鉄パイプは無し無し!! 危ねえーーーって!!! ちょ!!」

見方を変えれば全員が人殺しで、見方を変えれば誰かを守るために戦つていて、多分俺はまだ実感できない。人を殺すことの意味を。生きることの辛さ……というものをして、戦いはゲームと同じではない事を

世界よ、コジマに染まれ。

コジマに包まれて魅かれ輝け

嗚呼、そして世にコジマとAMIDAのあらん事を

# 目覚め

「ああー？ 目が覚めたら知らねえところに来てるし……俺車に轢かれたんじやねえの？ いや、直接見てはないけど気配というか……感覺というかで……」

「おい」

「はああああ、面倒くせえ……てかここどこだよ……？ 今日中に家に帰れるかなあ？ 財布もないし……」

「おい！」

頭に手を置いて上を見上げる。黒スーツでキツチリ決めて、眉間にしわを寄せている女のひとが俺を睨んでいた

「えーと？ なんでせう？」

あまりにも怖いんでとりあえず返事をする

「まず貴様の名前などを聞くのは後回しにしてだ……そ、それは……なんだ……??？」

さつきまで穴が開くほど俺を睨んでいた女がこちらへ人差し指を向ける。が、その手はどこかブルブルと震えていた

「？」

その手の直線上、つまり俺が胡座をかいている足と足の間を見ると  
「キューイー」

——AMIDAがいた——

「うおつ！ AMIDAじゃん!! ちつちえけど!!」

「あ、アミダ……？」

俺の胡座の上でAMIDAは、もしやもしやと俺の服を齧っていた  
「つて、なんでやねーん！」

ペコーン、と自分のおでこを叩く

「ちょ、ちょいちょいAMIDAちゃん？ なんで俺の服を齧つてんの？ 止めて止めて」  
「キューイー？」

AMIDAを両手で持つて服から遠ざける。名残惜しそうに脚を動かすが、じきに抵抗を止めた

「ん？」

AMIDAを持った自分の手に違和感を感じたので目を凝らす。すると

「…………俺の手から…………何か出てる？」

よく見ればそれは……緑色の粒子。その粒子を脚で絡みとるように掴み取つて口に運ぶAMIDA

「…………あのお…………」

「…………なんだ」

「付かぬ事を申しますが……これ、もしかしてコジマ粒子?」

「冷や汗ダラダラで問い合わせると、同じように冷や汗ダラダラの女性が答える  
「そうだ。そしてお前は…………私の見た光景が幻覚でなければ…………」

「え?! ナニソレ?! ちよ、まつて! 怖い! 怖い!!」

「この女! 何か嫌なフラグ立てそうだアツ!!

「お前は確かにコジマから出てきた…………ような…………」

「俺は人間をやめたぞ! ジョジ〇―――ッ!! 俺は人間を超越したツ!! コジマツ!! お  
前の粒子でだア―――ッ!!!

「うわあああ!! まじかあーー!! 俺人間じゃねえーじやん!? コジマじやん!」

「いや、お、落ち着け。私も何か立ち眩みというか…………なにか勘違いというか…………お前が  
コジマから現れたなんて…………そんなありえない事象の確証があるわけではないし…………」  
「いやいや…………もういいよ…………現に俺の体からコジマが迸つてるし…………A M I D Aは  
囁りに囁りまくつてるし…………俺の就職先つてもうトーラスぐらいしかねえじやん  
…………いや、マジかよ…………」

四つん這いになつて両手で地面をダンダンと叩きつける

「まあ、お前の体から出るのは微量のコジマ粒子だから汚染の心配はないはずだ」

「え？ マジで？」

パツと顔を上げる

「あ、うん」

微妙なイントネーションで頷かれたために信用ができない

「いや、ちよ、本当の事言つて？ 僕怒んないから」

「……微量のコジマが出ているが、汚染の心配はない……が、お前の体の中は高密度高濃度のコジマ粒子が詰まってるというか……コジマで出来ているというか」

「うわっほーーーい！！！コジマ汚染してんじゃねーの？ 僕（笑）」

「いや、コジマ汚染つてレベルのコジマ量では無いな……今喋れること自体が奇跡か何かとしか……」

「もうヤメテえええええ！！俺のライフは0よおおお!!？」

うぎやあああああああと耳を塞いでゴロンゴロンと地面を転がる

「お前は…一体どうしたものかな……」

女性のため息とともに溢れた言葉、持つて帰るか、捨て置くか。だろう

『おい、セレン。そつちに何かあつたのか？ 何も問題なければ探索を続行するが』

…………ん？ セレン？

「いや、ベルリオーズ。目的のものかは知らんが、企業の連中に持つて行かせるには惜しい奴は見つけた。連中ももう少しで嗅ぎつけるだろう。さっさと帰るぞ」  
「んんん!!ベルリオーズズズズズズ??!!

『分かった。車を準備しておく。ポイント $\alpha$ で集合だ。急げ、BFFの連中が近づいている』

「ああ、ではまた」

無線機を切った女性が、俺を見下ろす。俺も女性を見つめる  
「立て、とつとどこから立ち去るぞ」

「え、いや…………何処に行くので…しようかあ？」

AMIDAを抱きしめて尋ねると、女性が……俺の考えが正しいなら、セレン・ハイズ。本名を霞・スミカがこう言った

「私たち独立傭兵のアジトだ。さあ、動け！」

言うなりこの女は俺を本気蹴りして来やがった

「痛つ！蹴らないで!!ちゃんと立つから蹴らないで!!」

バシバシと背中を蹴られるので座つた状態でぴょんぴょん跳ねるように距離を取りながら立ち上がる

「痛てて……」

パンパンとズボンを叩いてホコリやら土やらを落とす。逆に手から出てきたコジマ粒子がズボンに付着した。ぬぬぬ

「ああそりだ、その蟲もつれて来るんだぞ。連中に取られたくは無いからな」

「え？セレンさんにもAMIDAの魅力が分かつてきたん？」

ヒヨイツとAMIDAを持ち上げてセレンさんに向けてみる。脚をワシャワシャと動かしてアミーゴーと言つてる。まあ、挨拶だよね

「ふざけるなっ!!!そんな気色の悪い奴が可愛く思えるわけがないっ！」

酷っ!!俺の手の中でAMIDAもショック受けてるよつ!?

「さつきと行くぞ、奴によればBFFがすぐ近くに来ているらしいからな…とつとと来てい！」

懐から取り出した新聞を丸めたものでパコパコと頭を叩かれる

「痛い痛い!!分かつた!分かつたから!!すぐ叩かない!!」

「時間が無いと言つてるだろう!!」

「じゃあ叩くなよ!!はあ、つたく」

ため息をついて頭上を見上げる。車に轢かれて死んだ世界では分からなかつたけど。

この世界の太陽は、酷く眩しかつた

# 白い巨人

「遅いぞ、セレン。BFFの連中がすぐそこまで来てる。直ぐに移動するぞ」

カモフラージュを施した車に寄りかかっていた男が、吸っていた煙草を地面に落とし、グリグリと靴底で踏み潰す……のではなく。爪先である程度穴を掘つてから底に入れ、丁寧に地ならしをしていく

「愚痴はこいつに言え。それよりさつさとここから離脱するぞ」

「まつたくお前という奴は……まあいい。誰かは知らないが、お前も早く乗れ。ここを出る」

「りよーかい……」

渋々とオフロードカー?に乗り込む。ベルリオーズと呼ばれた男が上から車に被せていた迷彩柄のシートを取り外して後部座席に突っ込む

「ぶわっ!」

体全体にシートが被さる

「少し埃臭いが我慢してくれ。行くぞ」

おらああ!!つとシートを顔から引張剥がす頃には車は既に動いていた

「…………セレン、それで、その少年は何者だ？」

ハンドルを握りながらベルリオーズがミラー越しに俺を見る。その眼はどこか値踏みしてるように気迫さえ感じられる

「聞いて驚くな？突然私の眼の前でコジマから出てきた。連中の手に渡れば…まあ、一発でトーラス送りだろう。変態共が喜びそうだ」

肩をすばめてシートへ体を押し付けながらセレンが良い。それをベルリオーズがハツ、と笑った

「セレン、冗談が過ぎるぞ。仮にもし、その少年がコジマの化身などであれば、お前はもう生きていない。私は見事自由ということだ」

ベルリオーズが横眼でセレンを見つめ、嬉しそうに聞こえない声音。平坦な声でそう呟く

「ふ、それこそ冗談が過ぎるな、ベルリオーズ。ピースシティでアナトリアの傭兵に撃破され、元ネクストの残骸の中で死にかけたお前達を助けてやつたのは誰だ？お前達に安息はない。この私が手放す限りな」

ニヤリ、と嗜虐心というか、サディスティックな笑顔全開のセレン。うわあああ、もしかしてこれ俺も奴隸化のパターン？ちょ、まつ

「まてまてまてまて、あんた俺をどうするつもりだ？」

「お前、私が連れ出さなければトーラス行きだつたんだぞ？そくなればどうなつていたらうなあ……」

「う、そ、それは……」

アームズフォートにコジマを搭載。6個のたこ焼きからコジマキヤノンを撃ち出す変態アームズフォートを造るトーラスに、実験動物になつてたかもなあ……「だろう？あの変態共のする事など私には到底理解も想像もつかんが。まあ、地獄だろうな……いや、逆にコジマの象徴として崇め奉られるかも知れんな」

「……トーラスよりはアスピナ行きじやないか？あそこもあそこで地獄だがな」

あすびな？

『え……AMSからから光が逆流する……！ウ!?……ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ!!!!』

「ハツ……アスピナと聞いてあのセリフが浮かんだ……フルソブレロは……フライルは……マズイ……う、頭が……」

前に一度フライルでたこ焼き戦（ソルディオス・オービット）に行つたのを思い出した。いや、もうアレは地獄だわ

「何を言つてるんだお前は？……まあ、アスピナの方が地獄といえば地獄か……あそこならまず人として扱われないからな」

え、何そのブラック企業…というか腹黒企業

「なんだ、知らないのか？アスピナは、実験のために必要とあらば、適性のある子供を市場で売買したり、時には攫つたりすることもあるくらいだ」

クツクツク、と笑う年増ババ<sub>r y</sub>にゾクつと悪寒や鳥肌が立つた頃。運転をしたまま、ベルリオーズが声をかけた

「セレン、驚かすのもそれぐらいにしておけ。来たぞ」

言うやいなや、セレンがほう、と感嘆の声を上げた

「もう来たのか、BFFは……おい、確かランチャードがあつただろう。何処だ」

「後部座席の中にある筈だ。少年……名前が無いのはやり辛いな」

「確かに。ふむ、名前……か」

「ん？ん？ん？あれ？あらう？ちょ、ちよつ貴女もしかして拾つた犬にペットの名前を

付ける感覚でいんの!?いやいやいや！俺にはちゃんとした名前が<sub>r y</sub>」

「よし！ストレイド!!あんな所で迷子になつていたからな！お前の名前は今からストレ

イドだ！」

ちょ……マジかよ!?

「ストレイド、座席の横にあるレバーを引いてくれ」

ベルリオさん!? アンタまで俺をそれで呼ぶん!?

「おい、さつさとしろ! ストレイド!」

かなりイラつてるセレンが俺の頭を叩き出した!!!!

「痛つ!? ま、までつて!! 今やるから!!」

グイツと思いつきリレバーを引くとシートがどつかいってでつかいケースが出てきた。何ぞこれ???

「ふんっ!!」

気合いとともにシートを後部座席側へ移動させたセレンが、でつかいケースからロケットランチャーを取り出して窓から身を乗り出した。その後ヘリコプターのローター音が響き渡る。そして、まばらに銃声

「来たぞつ!!!」

轟くベルリオーズの怒号。それに応えるかのようにシユゴウツツツ!!!!と弾頭がヘリ

コプターへと発射された

ドゴオオオオオオオオオオンツツツ!!!

弾頭をモロに喰らつたヘリコプターは、装甲が脆かつたか、当たりどころが悪かつた

のか。この世界のロケランの威力がすば抜けて高かつたのか機体を真つ二つにしながら墜落する

「ヒット」

やけに弾んだ声で呟きながらトンつと人差し指でハンドルを叩くベルリオーズ。だ  
がなあ

機体中を紅蓮に包み!..こちらへ向かつて墜落するヘリコプター。しかしこの二人は潜つてきた修羅場の数がモノを言うのか、動じることなく会話をする

「チツ、セレン。もう一発ブチ込んで軌道を変えろ。これでは私達もアレと心中だ」

が空いてるな……」

「しまつた、ちょうど切らしていたのか」

「あんたらどうしてそんなに平然としてられるんだよ…………」

この一人の会話に毒気を削がれた俺は、不意にこう思う

——あれ、俺つて。なんでこんなに興奮してんだ？

.....  
と

「ええい、他に何か無いのか？……おい、ストレイド？」

「え？」

「顔を上げると、俺を見ているセレンの顔が、とても呆れたようにため息をついていた  
「お前……こんな状況で良く笑ってられるな……ある意味大物かもな」

口に手を当てるなど、なるほど、俺の頬はやけにニヤついていた

「つ！セレン！」

ベルリオーズの声に焦りが混じる。それはつまり――――――

「つ！ちつ！！ここまでか!?」

セレンが俺の頭をグイッと下ろす

「痛つ!? セレンッ!!」

「黙れ!! 死にたくなれば祈れ!!」

ギュッと俺の頭を下げようとするセレンの手を握る

「そんなことしなくてもいいんだつて!!」

「!?なにを言つてるんだお前はつ!!死にたいのかッ!?」

ああもう。なんで分かんないんだ？

「分かんないかなあ!? セレン!!」

ヒュンヒュンヒュン――と、オフロードカーの真上をヘリが墜ちて。上空で爆発し

た

「つ…………そういう事か……」

異変に気付き窓から上を見上げたベルリオーズの声に、セレンも違和感を感じる  
「? どういうことだ……」

眉を顰めたセレンが窓から顔を出すと、上空には……そこには、白い巨人と、巨人の手の平の中へ押し潰されたヘリコプターの残骸が在った

「…………あれは…………アンビエント…………。BFFの、王小龍の秘蔵つ子。カラードランク2……リリウム・ウォルコットか…………」

バラララララララとヘリコプターのローター音が聞こえる。装甲にBFFと描かれた新たなヘリコプターがこちらへ近づいてくるのが見える

「ベルリオーズ」

「無理だ。アンビエントに車体を掴まっている。諦めて、王小龍が来るのを待つしか無い」

チツ、と舌打ちをするセレンとは変わり、ベルリオーズは煙草を取り出し一服していた

「アンビエント……ねえ……」

俺はなにをしていたかというと、後部座席のシートにもたれかかり、窓から、こちら

を見下ろす白い巨人。ネクストアンビエントを見つめていた  
「もしかすれば…………これから、面白くなるかもな…………」

確信めいた自分の言葉に、俺はヘリコプターが着地する際に発生する風圧の中で、  
ずっとアンビエントを見上げていた

# クソジジイと天使リリウム

「久しぶりだな、霞スミカ」

ヘリコプターから降りてきたジジイがこちらへ向かってみると、不機嫌を隠そそうしないかのよう眉間に皺を寄せたセレンが思いつきり舌打ちをする

「チツ……老害が……政治家がここまで一体何のようだ？ 王小龍」

「なに、ここらで貴様を見たと情報が入つたのでな……ほほう。ベルリオーズも一緒にはな。ピースシティでレオーネを装つた回収部隊が、レイレナード陣営の強襲部隊全滅の報告を偽つたというのは本当だつたか」

「元から信じる気など無かつただろう。何を今更。まさかぼけたか？ 貴様」

レオーネを装つた回収部隊つて……セレン一人でやつたんじやなくてスミちゃん軍団か？ 当時のレオーネ勢力内部で真つ二つだつたんだなー

「ストライド」

「ん？ なに」

ボーッと考へてみると運転席から声をかけられた。当然声をかけたのはベルリオーズだ

「いや、お前がアンビエントを見て目を輝かせていたからな。ネクストなど見てて面白いか」

「いやいやいや、実物のネクストを見たら普通興奮するでしょ」

「そう……か」

「??？」

ベルリオーズはそれっきり煙草を吸うことに専念するらしく、話しかけてこない。隣ではセレンがガミガミと言つて、ジジイは余裕そうに受け流している。しかもかなり余裕そうに

「…………ん？」

その時アンビエントの手の上に誰かが立つていると直感した。すぐに見上げると、白い髪の少女が、たなびく髪を抑えながらこちらを見つめていた

「あれがリリウム……か」

ボソッと呟いたのだが、少女は的確に俺を見つけた。とりあえず挨拶として軽く手を挙げたが、彼女は無表情で俺を見るだけだつた

「王小龍の秘蔵っ子、女王とは趣を異にする王女。言うなればロリコンクソジジイの操り人形。BFFの象徴へ祭り上げられたウォルコット家現当主……か」

ゲーム中の設定を必死に手繕りながらリリウム・ウォルコットについて思い出す

「よく知っているな。ストレイド」

再度声をかけられる

「まーねー。アンビエント自体がかなり強いし声が萌えるから印象に残るんだよねー」

「萌え?……る?」ふむ、アンビエントが強いか

「そりや強いでしょー。各種レーダー性能の高いリリウムレーダーに追尾性の高い旋回性能が売りのリリウムミサイル。かの最強リンクス。アナトリアの傭兵、ランク9ホワイト・グリントも愛用のリリウムライフル。そして弾速速し! レーザーの射撃減衰低し!! なにを言つてもレーザーが小さいから相手には見えにくい!! ランク1の水没王子(笑)よりも強い! そして声が萌える!!!!」

「そ、そうか (こいつは何故リリウム・ウォルコット、アンビエントについてこんなにも詳しいんだ? そして萌えとはなんだ?)」

わいのわいの勝手に騒いでいるストレイドの傍で、セレンと王小龍は静かな攻防戦を続けていた

「セレン、あの少年は何だ」

「貴様には関係の無いことだジジイ」

「ふん、リリウム。こっちへ来い」

無線を通じて少女の声が聞こえる。もちろん変態ロリコン不死身糞ジジイに従う意味での肯定の意だ

「?……一体何をする気だ? 王小龍」

「なに、少し聞こえたが、あの少年はリリウムに興味を持つておるらしいからな、顔を見てやるだけだ」

「そんなものはいい。私たちは今から帰るところだからな」

嫌な展開だ。セレンはそう直感し、ベルリオーズに車を出せとシートを蹴りつける。が、そもそも車はアンビエントの手に掴まれているため、動かすことはできない。ベルリオーズと顔を見合わせたセレンは、舌打ちをしてドカツヒシートに体を沈めた

「何でしょう。王大人」

(リリウム・ウォルコット……!?) うわあ!? か、可愛い……しかも声も……可愛いすぎるだろ……こんな人間がいるなんて……車に轢かれてよかつた……!! その結果今コジマだけど)

セレンがベルリオーズの座つている運転席をドカドカと蹴りまくつるので、何だ?

と思つていたら、窓の外にこちらへ走つてくる少女が見えた。勿論リリウムだ  
「やべえ可愛い…………」

[?]

小さく漏らした言葉にコテン、と首を傾げるリリウム。無表情でそれをするのがまた……萌える

「リリウム、名を名乗りなさい」

「はい、王大人。初めましてセレン・ヘイズ……いえ、霞スミカ様」

ペコりと綺麗な角度でお辞儀をする少女に、セレンはフン、と鼻を鳴らして不満げに口を開く

「私の名前はセレンだ。霞スミカなど知らん」

「それは申し訳ございませんでした。セレン様。それに、ベルリオーズ様も、お初目にかかります。リリウム・ウォルコットと申します」

「ああ、ウォルコット姉弟の一人娘だつたか」

…………ん？姉弟の一人…………娘…………え？それって、姉弟でやつたん？近親相〇？マジで？

「ストレイド。お前も挨拶をしておけ」

ベルリオーズの声に思考の海からハツと抜け出した俺は、俺を見つめる少女へ頭をさげる

「初めまして、俺の名前は……まあ、ストレイドって呼んで」

「はい、かしこまりました。ストレイド様」

「いや、そんな堅苦しい接し方じやなくて良いんだけど」「そう……ですか…………？」

ピクッと彼女の眉が動いた、どうやらこんな事を言い出したのは俺だけだつたようだ  
「んー、俺の事は何て呼んでもらおつかなー」

「おい、ストレイド」

元の名前で呼んで貰うか？「○○さん♡」とかでも良いし？

「ぐお、つ、…………！」

リリウムとの脳内イチャラブを思い描いていると、まさかの狂犬乱入。脇腹にドスツ  
と一撃を喰らつた俺は、口をパクパクと開閉させて酸素を求め喘ぐ  
「な、なにかナ……？ セレンサン？」

「顔見せは終わつただろう。おい、ジジイ。さつさと帰らせろ」

「ふむ、まあ、よいか。リリウム」

「はい、王大人。それでは皆様」

「あ、ああ！待つて！」  
再度俺たちにペコッとお辞儀をしてアンビエントへ駆け出していく

「ぐ、ストレイド……貴様」

セレンの顔をグイッと押しのけ声を掛けてリリウムを止める。セレンがなんか言つてゐるが関係無い

「俺のこと！次からは様付けしないでよー！呼び捨てかさん付けで！いいね!?また会えるの！楽しみにしてる！じやあ！」

大声でまくしたてたが、リリウムはこちらを向きながら一瞬きょとん、とした後。「はい」とずっと無表情だった顔を微笑ませて言つた

「…………チツ、さつさと出せ」

舌打ちをしてセレンが運転席を蹴りつける

「フ、嫉妬か？セレン。八つ当たりはするな」

アンビエントの手が車から離れ、エンジンが始動する。最後にセレンがクソジジイに中指を立ててファ○クユーをしてから一気に動き出す

「あー可愛かったなあー！リリウム」

「ストレイド。帰つたら分かつてるな？」

リリウムとの会話を思い返していると、セレンがドスの利いた声で言い出した  
「……わ、ワンモアブリューズ？」

「ふ、ふふ、ふふふふ。帰つたら即斃だなあ！ふふふ、ふふふふふふふ」

「オウ…………」

セレンの独り笑いに頭を抱える。やべ、これ詰んだわ…………と  
「でもまあ、リリウムを直で見れたのは嬉しかったなー」

「あんな小娘の何がいいのやら」

「いやいやw誰だつてババアより若い方が良いでしょwwwwww何言つてんのスミちゃん  
www」

ドガーンッ!!!

「…………は…………」

腹を抱えてバカ笑いしてたら轟音とともに寄りかかっていた車のドアに衝撃が走る。  
穴も空いてるし

「な、なんですか？ソレ」

「ムカついたらジジイを殺すために隠し持っていた拳銃だ」

「ひよ…………」

ムカついたらつて…………あんた…………

あまりの暴論に絶句してしまう。この人だけは怒らせたらマジでやべえ

「ああ、ストレイド。これから寝床へ帰るが、こいつだけは怒らせないほうがいいぞ。こ  
いつは怒るととても恐ろしいからな」

「ベルリオーズ……それ言うの……遅すぎますて……」

軽いノリでそれを言つたベルリオーズに恨み言の様に呴く。おせーよお前、と  
「ベルリオーズ、番犬はいるか?」

「いいや、オービ工はアンシールと例の仕事だ。お前が言つた筈だろ。それに、ザンニは  
先日探りに向かわせたからな。今いるのはP・ダムぐらいだ」

「オウ……リンクス戦争中影が薄すぎて生死もあやふやだつたオービ工さん番犬扱い  
かよ

「なら帰つてこいつの適性を調べるぞ」

「適性、あると思うのか」

「なかつたらなかつたで売るしk」

「いやいやいやいやwちよwスミちゃんwwwそんな冗談やめてー!?! www」

「うるさい!!スミちゃんと呼ぶなっ!!」

「スミちゃん。フツ……」

「くくくくツツツ!!!フンツ!!!」

「いだつ!?」

ボカつと頭を殴られる。バキッと顔も殴られた。やべえ、こいつ今すぐリリウムと  
とつかえて欲しいんだけど。つーかベルリオーズは空氣読めや

「ん、ベルリオーズ。そろそろか？」

「いや、もう終わってる」

？……そろそろ？ 終わった？ どうこと

「ふん、中々優秀な犬になつたようだ」

「あの老獴な爺の歯がむ顔が浮かぶな」

クツクツクと、二人して悪い笑みを浮かべていて。ベルリオーズは癖なのかハンドルをトントントンッと軽快なリズムで叩いている

「二人共なんだよー…………隠し事すんなよな…………」

「拗ねるな、ストレイド。お前は知らなくていいことだからな」

ニヤツと口の端を歪めるベルリオーズ。ほんと、なんなんだよ…………

???

『拗ねるな、ストレイド。お前は知らなくていいことだからな』

「へつ、知らなくていいことか。なア相棒。後続はどうだア？」

『ケツ、先行隊が殺られただけでパタツと止まりやがつたぜ。俺たちの時と同じだ。チツ、あの老害が、死に腐れ』

『ハツ……！ んなら俺らもとつとと帰ろうぜツ！』

『それは俺も同意見だ……チツ、あのクソ女もだ、くだらねえことにこき使いやがつて……』

「あーア、にしても、新入り、どう思う？」

『ああ？ ああ、例のガキか……使えるんだつたら死なねえ程度に使えつてだけだな。どうせ俺には関係ねえ』

「へツ、そうかい。んじや、とつとと帰るぞアンシール」

『ああ……やつとかよ……オービエ……ケツ』

# 独立組織 セレン組アジト

「…………、何処だよ？」

車で何時間も揺らされ、車ごと中型の船に乗せられて、更に波に揺られながらたどり着いたのは、建物に押し潰されペしやんこになつた残骸の跡地だつた

「おい、セレン？此処だよ」

ハイヒールを履いている癖に辺りに散らばつてゐる瓦礫に足を取られずに歩くセレンへ声をかける

「此処は……ベルリオーズ。お前が話せ」

「分かつた……此処は旧レイレナード本社、エグザウイル…その跡地だ。ストレイド」  
船から出てきたベルリオーズが腕に巻きつけていた繩を船に縛り付けてからそう答えた……いや、その前に…エグザウイル？……

「それつてもしかしながら、アナトリアの傭兵が破壊したやつでしょ？」

「ああ、そうだ」

そう言うベルリオーズは、意味深な風にニヤリと笑うと腰を持ち上げた

「いやいや、そうだつて……じゃあなにか？此処に来た意味つてあるわけ？」

「そう急かすな、ストレイド……そうだな……まあ、数年前アナトリアの傭兵に壊されたのは……エグザウイルの表面と思つてくれればいい」

「あ？ 怪訝な顔をした俺をベルリオーズはニヤニヤと笑うと、近くにあるいかにも重そうな瓦礫を簡単に退かしてしまった

「…………は？」

瓦礫を退かした先にあつたものは……扉？

「さあ、行くぞ。ストレイド」

扉を開いたベルリオーズの後をついていくと、其処は…エレベーター？何で潰れた建物にこんなものが……もしかして、地下施設がある？

「地上のエグザウイルはただの囮だ」

「…………え」

ウイイイイイン、とエレベーターの扉が閉まり、ボタンを押した後でベルリオーズが口を開いた

「レイレナード本社であるエグザウイル。その実態は他の企業も気づくことのなかつた場所にあつた……つまり地下だ」

「何で地下なんかに？」

「ふ、まずあれほどの独特な形状をしている本社の何処でネクストや自律型の実験がで

きると思う？……あとは、あれだけ目立つ建物なら、オーメルの奴らも簡単に騙せると思つたからだ。くく、思いの外効果的だつたが……」

優秀なリンクス、研究者、その他諸々が集つた技術水準の非常に高い企業、オーメル・サイエンス・テクノロジー。ローゼンタールの傘下企業でありますがらリンクス戦争を影から操つていたと言つても差し支えのない企業

リンクス戦争では秘蔵つ子のセロやミドを投入。ミドは旧ピースシティでベルリオーズ率いるレイレナードの強襲部隊とぶつけ。ノーマルモードではアナトリアの傭兵と共に戦い。運が良い奴。r タイマン環境を作つた奴。r ミドたんハアハアの奴なら“羽”を全く使わない役立たずのレオハルト共に生存していく、ハードだと死んでるのか、もしくは戦闘不能になつたかで既に戦線からリタイアしている。前者のセロについては、何やら薄汚い事をやつてのけてアナトリアの傭兵の戦友であるジヨシュアを嗾けてコロニーアナトリアを襲撃。高密度のコジマ汚染でアナトリアを使えなくさせ、アナトリアの傭兵さえも葬ろうとした……あまつさえジョシュアとアナトリアの傭兵。両方を殺すために天才坊やを放り込むもんだからな……そんな奴らを騙せたのが嬉しいのかね？ベルリオーズは

「今話した通りだが、レイレナード本社エグザウイルは地下にある」

「だけどさ、オーメルがエグザウイルを探索する可能性もあつたんじやないか？なんで

地下の本社がバレてない?」

「ブフツー! ククク!! ハハハハハハハハ!!!」

突如腹を抱え笑い出したベルリオーズ。どうした? あんた笑わされる事を強いられてんのか?

「煩いぞ……ベルリオーズ!」

「ドスツツツツツツ!!!!」

「ゴフツ……!!」

しゃがんだベルリオーズの腹を足蹴し、よろめきながら立ち上がった所を腹パン。その威力……ヤバすぎる

「グツ……カハツ……ゲホゲホ……」

「このエレベーターは広いわけではないんだ……あまり私の機嫌を悪くさせるなよ」

ボソッと呟いたセレンの言葉にゾクリと背筋が凍りつく、ベルリオーズもコクコクと頷いていた

「こほん、さつきの疑問だが……アナトリアの傭兵が表のハリボテを壊した所でレイレ

ナードはある粒子を一体にばら撒いた

「ある、粒子?」

「ああ、コジマ粒子に非常に似ているが……害のない粒子……それをばら撒いた途端ア

ナトリアの傭兵は撤退し、オーメルの連中もここへ寄り付かなくなつた：他の企業達もな」

「なるほど……そんなものが…あつたのか」

「コジマ粒子のようにネクストを動かすエネルギーにも使えない上に非常に似ていて紛らわしいからな、それは便宜上ゴシマ粒子と呼ばれている」

コジマ→ゴシマ？コ、と、ジの濁点を入れ替わつてるだけかよ

「だから未だに他所の奴らは寄り付かない。私たちは悠々と此処を秘密のアジトにしているわけだ」

「秘密のアジト……」

エレベーターの扉が開いて目の前の景色が見えた時、確かに此処は秘密のアジトだな、と思った。そこは、だだつ広い格納庫のような場所で、AC…この場合はノーマルACか…それが辺り一面に所狭しと並んであつた。しかも地上へ送ることもできるのか、エヴァンゲリオンに出てくるカタパルトのようなものもあつた

「セレンさん！それにベルリオーズ大尉もっ！お疲れ様です」

声をした方を向くと、髪を肩より上ぐらいで切りそろえたショートヘアの女の子がピシッと敬礼をした

「あ！ そうだつ、セレンさん！ 今からシユミレーションで動きを見てもらつてくれませんか!!」

「悪いがこれからコイツのAMS適性があるかどうか調べる……その後でな、マリナ」「つ！ はいっ！」

マリナと呼ばれた少女が嬉しそうな顔で走り去つていった。そして……その後ろ姿をセレンはとても哀しそうな顔で見送つていた

「……ストライド。今からお前のAMS適性を調べる場所に行くぞ、セレン。それで良いだろう」

「…………ああ、そうだな」

…………？ ちょっと、展開について行けません。あの娘誰ですか？ 紹介しろや

「…ううむ、まあ、いいか」

とりあえずAMS適性がある事を祈ろう。なかつたら捨てられない事を祈ろう。

有つたらボロ雑巾にされない事を祈ろう

「お！ ベルリオーズの旦那！ もう帰つて来たんで？ 何か戦利品はありやしたか？ ……ほ  
う、その小僧ですか：イキはありますですが……」

「セレン、今月の収入と支出：赤字は無いが研究室の奴ら、使いすぎるぞ。オービ工とア  
ンシールを今回使つたんだろう？ さほどバーツを消耗してなければいいがな……整備

の方にも気を遣わないと折角のネクストもクソだぞ？」

「やあ、セレン。それにベルリオーズも、今度農場ファームの方へ来なよ。果物が丁度いい具合で熟れてるからさ。魚も上等のが育つてるとね」

「あー・ベルリオーズ大尉！お疲れ様であります!!私たちですか？レツドイエーガー中隊はこれよりアリーナの方で連携強化の模擬戦闘をブラックドレイク隊と行う所であります！それではっ！」

セレンとベルリオーズと歩いていると、度々声をかけられる。制服姿の職員だとか、ツナギ姿の整備員だとか、麦わら帽子を被つた青年だとか、軍服姿の将校だとか

「中々に賑わってるな」

「リンクス戦争から、もう数年が経つたと言うべきか、それともまだ数年しか経つてないというべきか。かつての本社の人員はすでに超えただろう。それでも未だに拡大して続いているぞ」

「すげえな……何気に

「そういえば……さつきの……マリナ？ つて娘、なんなの？ シュミレーションがどうたら言つてたけど……」

「ああ、あれは「着いたぞ、ストレイド」

最初に出会った女の子の事を聞こうとすると、セレンが勝手に話を切り上げた

「お前に適性があるか調べるんだ。他の事に気を取られるなよ」

ギロツという擬音が聞こえる目の圧に首を竦ませながら苦笑い

「P・ダムはいるか？」

部屋の中へ入つたベルリオーズが、辺りを見回しながら一人のリンクス名を言つた

P・ダム

リンクスNo. 21の変態企業所属のリンクスでコジマライフルの武器腕とか言う  
変態武器を使つてなたなあ……変態めつ！

最初期のコジマ兵装で強いとか言われてたらしいし、高い戦闘力を持つらしいけど  
……当たらなくてはどうという事はない!!てか乗機のヒラリエスが軽くブースター吹  
かせただけで死ぬからな！動かねえ的だろ！

旧ピースシティでの戦闘じや錯乱してはなかつたけど、コジマ汚染で結構神経が不安  
定で作戦中の妨げにもなつてたらしい

「……いないのか？」

「いや、いるはずだが…少し待て」

中へ入つていったベルリオーズが部屋の電気をつける、何処にでもあるような事務室

みたいだ……前言撤回。何処にでもある事務室に「月刊トーラス」だとか「週刊汚染コジマ」なんて書かれてる明らかにコジマの溢れ出す雑誌は置いてねええ「おい！……ダムは何処にもいないのか？」

「さて、奥の部屋を見て来る」

「ちつ、とセレンが舌打ちし、ベルリオーズが奥にあれ部屋へと入っていく  
【それでも週刊汚染コジマか……ひつでえ名前……】

掲載漫画は……ええと？

……  
：汚染！汚染！汚染！汚染！コジマのヒーローアクアビットマン 作者アクアビットマン  
・トーラス長老から世界の平和を守るためにコジマ汚染を巡る戦いの旅に出たアクア  
ビットマン！しかしそんな彼の前に盟友レイレナードマンと戦うダンボールがいて

：コジマの守護神トーラスマントラ 作者銀爺

…AMIDA研究。如月研究所の憂鬱 作者如月

・今日も今日とてAMIDAを使って実験だ☆あ、ヤベツ☆ミスつてAMIDAを外に出しちやつた♪こんな時はレイヴンを雇うしかないよネ☆しくよろレイヴン♪

…万能オペ娘☆フイオナ・イエルネフェルト作者アナトリアの傭兵

・この作品は万能オペ娘であるフイオナ・イエルネフェルトの日常を記した全世界の傭兵たちに届ける俺の嫁の物語である!!全てのオペ娘共よ!刮目せよ!!俺の嫁を!!

…俺の愛がラブな ふいおな日記 作者アナトリアの傭兵

・これは俺が生涯愛する嫁へのポエムや彼女との日々を描いた日記だ。たまに戦闘もある。最近うちにちよつかい出し始めた糞ガキがうざい

…チエック・メイト 作者メルツエル

・今日も一局チエスの話をしようか。世界がコジマに汚染されなければ…人が過ちを犯さなければチエスボードを叩いて生きていたはずの男の話を……

まだまだイケるぜえええ!!メルツエエエエル!!! 作者ヴァオー

・うおー!!まだまだイケるぜえええ!!メルツエエエエル!!!

「か、カオスすぎる……乗せてる漫画も、タイトルも、あらすじさえも!!なんだこれ

……」

とんでもなくカオスな内容にまたも苦笑い

「チェック・メイトとアナトリアの傭兵の漫画は見てみたいかも……」  
雑誌を取つてソファに手をつきながら座ろうとする  
むにゅつ♪

「ん……」

「あれ？なんか聞こえた？それにやたら柔らかいぞ？」このソファ……  
むにゅむにゅ♪

「ん……う……」

「おい、お前は何を揉んでいるんだ……（怒）」

セレンから背筋にゾクつと来る説教を食らつて、はてなマークをつけながらソファー  
に眼を向けると

「うわ!? 誰!？」

ソファーに女性が眠つていて、俺はその人の胸をしきり揉んでいた。もみもみ

「……んん……ん、ふう：」

「さつさとやめないかっ！」

ドスツツツツツツツツ!!!

「グブツ!!」

鳩尾にセレンの拳が突き刺さった。ぐはつ!?これがツンデレババアのパンチか！

(ストレイド……もうあいつの1発を食らったのか……可哀想に)

「ふんっ！」

「ゲホツゲホツ……ガハツ……!?くふうつ……グバア……」

あまりの威力に膝をついて固まる。これは……確かにベルリオーズも恐れるぐらいだわ……

「んふ……う?……帰つて来たのか?」

「お前はまた寝ていたのか、P・ダム」

「ふふ、そんなに睨むなセレン。お前も知つてるだろう……私の症状を」

「陰りのある微笑みを浮かべるP・ダム。もしかしてコジマ汚染で……」

「ああ、コジマ汚染症状を治療した代わりに四六時中眠気でいっぱいなニート病だろう」「ピースシティーでの戦闘の代償がこれとはな……笑わせる」

「おい（怒）」

「そんなに怒るな。それよりもベルリオーズ、彼の紹介を」

キレ氣味のセレンを軽々と流して俺に視線を向ける

「こいつはストレイド。AMS適性を持つているかも知れない男だ」

「……そうか、これからよろしくと言つておこう」

そう言つて俺に握手を求めてきたので、その手を握り返した

「……やはり適性があつたか」

「？」

どういう事だ？

「おおい！セレン！飯はまだかよ？」

「チツ、今回の出撃だが、やつぱアリーヤの狙撃強化型カスタムじやあレツドキヤツプレベルの精度が見込めねえ…おい！ババア、何とかしろよクソが」

「誰がババアかつ！まずは死ねっ！」

「バギヤツ!!!ベギヤツ!!!

「ゴブフウウ!!!!」

扉を豪快に開け放つて入ってきた男二人の顔面をセレンは回し蹴り、後ろ回し蹴りをしてノックダウンさせた。南無

「……それで、ダム。適正ランクはどれぐらいだ」

セレンが視線を投げかけると、本を読んでいたP・ダムが読んでいたページに葉を挟んで本をパタンと閉じた

「ああ、大戦時の最高ランク、セロ以上に見える。セロを超える適性を持つ者は見た事がないから。リンクスの中で最も適性の高いリンクスだな」

「視える……か、その眼も難儀だな。P・ダム」

壁に寄りかかり、腕組みをしていたベルリオーズが口を開いた

「そう悪くない。持つてる奴が色鮮やかに見えるのは綺麗だ……」

眼を細めて呟いたP・ダムはベルリオーズやセレン、床に伏した男二人を見つめた後で俺を見た

「ストレイド、お前はこの中で一際鮮やかだ、まるで何かの幻のよう……」

「???だからそれ、どういう」

「お前ならアレサも難なく使える筈だ。あの災厄どころか、物置にひつそりと佇むあのアリーヤですらさえも」

「…………アレ…か。まあ、お前がそう言うんなら。そうなんだろうな」

「??」

うんうんと意味深に頷くベルリオーズとセレン

「セレン。ストレイドに適性があるのは分かつただろう？次は慣れさせよう。マリナもいる事だしな」

「…………そうだな」

慣れさせる?????

「行くぞストレイド。お前には使い物になつてもらわなければならないのだからな」

「私はこいつらを部屋に連れて行く。セレンの後を追え、ストレイド」

カツカツと廊下を歩いていくセレン。床に伏した男を解放するベルリオーズ

「…………生きろよ、ストレイド」

「…………ん？」

ボソッと聞こえた声に振り向くと、ソファに座ったP・ダムが、表情をのぞかせない表情で俺をジッと見ていてるようでぼーっと見つめていた

「私たちに出来なかつた事を、お前なら」

「…………まあ、頑張るよ」

呟いたつきり、眼を伏したP・ダムへ言葉をかける。ん? 何だか服がモゾモゾと……

「アミーーー!!」

「うおっ!!」

服の中から飛び出たAMIDAがコジマ色の羽を動かしてP・ダムの頭に着陸した

「…………（あそこ）が気に入つたのか?」

P・ダムを見てると、何処か達観しているような雰囲気がある。悟ってる? コジマ汚染の影響か? 何か視えるとか言つてたし

「ぶふおう!」

「…………」

無表情な顔で俺を見つめるP・ダムを見てたら凄いことに気づいた。の方上はシャツだけでした何も履いてねえ。パンティー見えてる

「おい！ストレイド!!何をやつてる！殴られたいかっ!!」

「うげ、や、やべ、早く行つとこ……」

ずっと見ていたかつたけどセレンの声が廊下を響き渡つたので慌ててセレンの後を駆け出した

# ネクストやつてみよう

「おいおい、次はどこに行くんだよ?」

「シユミレータ室だ」

廊下を歩きにくそうなハイヒールでカツカツカツカツと超早足で歩くセレン……カツカツ言いすぎてどこぞのよそ見して隕石に衝突して死亡した糞ガキ（笑）を思い出しちゃまつた

「…………こだ、入れ」

バコツ……

「あ…………痛う…………なんで叩いた?」

「くだらん事を考へている暇は無いぞ、ストレイド。なにせ、貴様にはこれからネクストの基礎を叩き込むと共に、二度と私に舐めた口を聞けないように躊躇してやるのだからな」

「はつはつはあ…N i c e j o k e — ぐふつ……!」

セレンの冗談を軽く吹き飛ばそうとしたら肘を喰らった。死にそう

「一言逆らうたびに威力が上がつて行くぞ（ボソツ）」

「ぜえ…ぜえ…え、なんか言つた?」

腹を抑えて蹲る、耳元に何か不吉な言葉が聞こえたような気がし r y  
「……………」

「お願いなんか言つて!!」

え? ちよ、なんて言つた? お、思い出せ! 僕えええ。僕の今後の生死がはつきりと分  
かれる場面だぞココハア!!!

「……………ひ、1ココアさ、坂? 旅人に医療が挙がつてく?」

ドゴツツツツッ!!

「ぐふえ…………!!」

もう、何も言わない (達観)

「マリナ、居るか?」

自動ドアを開けて、中に入つたセレンがキヨロキヨロと周りを見渡す

「…………シユミレータ中か……」

「んん? アリーヤやんけえ! グベエ!!」

セレンの後ろから顔をひよこつと出すと、座り心地の良さそうな椅子に座つて頭にヘ  
ルメットをした少女と、モニターがあり、その画面には一機のアリーヤと、数十機のノー  
マルACが戦闘していて、俺は誰かがアリーヤを操作していることに感動して声を出し

たら、セレンに顔を殴られた

「…………」

「い、痛たたたた……ん？」

顔を撫でながら画面を見ると、目の前のアリーヤはあまり操作がおぼつかないようで、ブースターを軽く吹かせている最中に足を地面に引っ掛け転がつたり、クイックブーストを起動してビルに衝突したり、ビルという死角を用いずに突っ込んでノーマルAC達の弾幕を一身に受けていた

(…………まあ、何が言いたいかと……)

このプレイヤー……アリーヤ使うの下手すぎ

そしてアリーヤは、一機もノーマルACを落とすことが出来ずにおPを全損させた

「…………ふはあ……!!…………はあ、はあ……ん、ふつ……はあはあ……」

頭のどでかいヘルメットを外した少女が荒い息で喘ぐ。ウホツ、俺のドミナントが——

ズゴツツツツツツ!!!

「うぶお、つ、!?」

「マリナ、私が帰つてくる間に、何時間動かしていた」「はあはあ…………はあ……せ、セレンさん」

「答える」

脛を思いつきり蹴られて腰を落としてスリスリと両手で痛むところをこする俺の横で、腕組みをしながら憮然とした顔つきで少女を睨み付けるセレン  
 「はあ……はあ……んぐ……ろ、6時間…………ですかね……」

セレンの顔が般若のようになり、少女もそれが分かったのか、いや。後ろのオーラが半端無いからだろう、体を縮こませた。俺は予感した、どでかい一発が来るどーーーと「休め、今日はもうシユミレータは使うな……いいな」

「…………はい」

あれ? 何も……なし? 僕だつたらぶん殴つたり蹴り飛ばしたりするのに? なにこれ、差別?

「ストライド」

「ん?」

「これを被つて椅子に座れ」

セレンが片手に黒いヘルメットを持って、右手の親指をゆっくりと椅子へ下ろす。ねえ、なにそれ俺に死ねと言つてんの?

「まつたく、なにこれ…おお、すっぽりはまつた…あ、いい匂いが……」

「さつさとしろっ!!」

「グウツツツツツツ……ハウ……は、はいい」

本日何度も腹パンを喰らつてヘルメットを被る、椅子に座つて背もたれに体を沈ませる

「まずは機体の選択だ。上から順にG A、ローゼンタール、インテリオル・ユニオン、あとはレイナードのアリーヤだな」

「ふむふむ」

まあ、見なくてもわかるけど、A C F Aでの初期機体ですね。名前もそのままストレイド

「アリーヤ一択でしょ」

「…………ほう」

え、なにそのお前に使えるのか？的な視線

「武器は…………オーメルの刺殺用ライフルにドラゴンスレイヤー……つと、横方向に拡がる散布ミサにO G O T O ☆そんで最後に肩にB F Fフレア乗つけて出来上がり  
アサルトライフルか横散布ミサで動きを制限してO G O T Oの当て勘でゴールする  
かムーンライトあつたらムーンライトで斬るかどうかかな機体

「そんで？これからなにす——」

俺はそれ以上口を開くことが出来なかつた。頭を酷い激痛が走つたからだ

「いぎつ！ガツ……！」

思わずヘルメットを掴み、脱ぎ捨ててしまいそうになる。しかし、その両手を誰かが  
がっしりと握る

「落ち着け、ストレイド」

「…………ぐ……？」

「その痛みはリンクスであれば誰もが体感する痛みだ、落ち着け……痛みは徐々に引いていく」

歌うように、囁くようなセレンの声に、確かに俺の頭を響く、割れるような痛みはあつ  
という間に消えて行つた

「はあ、はあ……はあはあ……はあはあ……はあ、はあ……」

呼吸が、次第にゆつくりになつて……呼吸音が……遅くなつていく……微睡む  
……眠い……瞼を閉じる。寝るわけじゃ無いぞ？ただ、少し、疲れた……から……  
一瞬……一瞬だけ目を瞑るだけ……大丈夫……黒いバイザーで、セレンからは俺が寝  
てるなんて……見え……な……」

「…………繋がつたか……見せて貰うぞ、お前の力を……」

……………？なんだ。

視界が…………真っ白に……？

『——搭乗者との接続を確認。シユミレータスタンバイ……5、4、3……  
???どこだ?ここは……砂漠…………?ん?

『リンクスタート』

「———————つ…………?…………?」は…………何処だ…………?』

目の前に広がる広大な砂漠。巨大なビル群

「…………いや、ありえない…………ありえないんだけど?…………もしかしなくとも  
…………?こは…………」

シユミレーターの中か?

「…………まじか…………」

「…………うん…………まあ、それしか無いよな…………じゃ無いと

「目の前のアレを説明できねーもんな」

目の前のアレ。背中にミサイル、手にはライフルを持つた鋼鉄の巨人

「アーマードコア……いや、ノーマルAC：かよ」

俺の言葉に反応するように、ノーマルAC達が手に持ったライフルを向けてくる  
「つ！ち、くそつ！」

遠くからでもミサイルが飛んできたのが分かる。目に、赤いロツクオンマークが、  
カーソルが合わせられる。これがミサイルの筈だ

「だけど……どう動けばいいんだよ!?」

なんの説明もなしにこんなことされたって何もできねーに決まつてんだろおおおお

おおお

「うぐっ!!」

ドゴオオオオンドゴオオオオンドゴオオオオン

ミサイルが俺に衝突した。腕に、胸に、足に、小さく痛みが走る

「……………これは」

「バチバチ………という音と、死んでもおかしく無いほどの爆撃を喰らって、小さな痛み  
で済んだのに疑問を感じる

「これ…………コジマか…………もしかして、俺の体…………ネクスト？」

右手を見て、左手も見る。俺の手は……真っ黒な機械だった  
「つて！また来た！」

自分の体を見て惚けている間に、次のミサイルが飛んできた

「うえつ！えつ！う、お、う」

「どどどどどど、どうするよおおおお!!う、うおおお!!や、やつてやる!!やつてやーー

「逃げるんだよオ!!」

両腕を動かし、足を動かし、一心不乱。ミサイルから背中を向けてビルの裏へと駆け出す

「うおおおおおおおお!!!!?」

足元目の前左右からミサイルが着弾して爆風が吹き飛んでいく。しかし俺は決して止まることなくビルの裏側へ到達した——

『うおおおおおおおお!!!!』

「は、走つてますね…あはは……」

「…………」

「セレンさん?」

モニターの前、画面を見つめている2人。ミサイルから逃げるためにブースターを使わずに機体に備わった両腕と両脚を駆使して必死に走るアリーヤを見て苦笑いする若

き少女リンクス、マリナ。そして彼女とは対照的に走るネクストを険しい顔つきで見つめるセレン・ヘイズ

「リンクスにはAMS適正があるのは知っているな？マリナ」

「は、はい、AMS、アレゴリー・ミニュピレイト・システム。これを縮めてAMSと呼ばれる適正があつて初めて私たちリンクスはネクストを動かすことができます。そして、この適正が高いほどネクスト操縦時の精神負荷が軽くなりますです」

「そうだ。そしてそれとは別に、適正が高いほど自分の思考をネクストにトレース……つまり、より人間の動きをネクストで再現出来るようになる……と言われている」

「つ、つまりネクストで回し蹴りや一本背負バック転が出来るんですか？」

「ああ、逆に低い者は軽いブースト噴射でもこけたり旋回するのも一苦労する」

セレンが呟くと、少女は自身が先ほど犯してしまったブースト中のズッコケを思い出して肩を落とす。しかしほれはその少女の肩をポンと叩いた  
「心配するな、お前ならやれるさ」

「セレンさん…………」

傍目に見ればよい師弟関係だが、セレンの腹パンをすでに何発も喰らってるストレイドが聞けば声高らかに差別だろ!?と叫んでいただろう

そして、そんな彼は、というと

「ぬおおおおおおおおおお!!!!」

相も変わらずミサイルから背を向け砂漠のビル群を走り抜けていた  
「ぐつー、このままじゃらちがあかねえ!!」

言つてライフルをミサイルへ向ける

「死ねえええええええ」

某天空城の王（笑）の大佐のような奇声とともにライフルのトリガーを引く。軽い反動と共に銃弾がミサイルへと駆け、数秒後に爆発した——かに思われたがそれは全てストライドの幻想でした。弾丸は一様に明後日の方向へと消え、ミサイルは特攻よろしくアリーヤの装甲へ突き刺さった

ミサイルの衝撃で体勢を崩したアリーヤへ再び放たれるミサイル

ミサノの復讐で体勢を崩したミサノ再び放たれるミサノ  
「ちつ！誰だ！？変なナレーション入れやがった奴は!!正直に射撃下手ですね！とか言つ  
とけ！！」

愚痴りながら足を動かす。幸いにも、足が疲れたり、横腹が痛くなつてきた……などは無い。いくらでも走れる

「よぬ！」

ミサイルが斜めから襲つてきた瞬間上へジャンプする、ミサイルが砂へ突き刺さり爆発。熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い

「ああああチヤア————!!」

バタバタしながら後ろを向くと、ほらまたミサイル来たでほんま  
「どどどどどーする!?どーどだ」

あ、そうだ！肩フレア使えばええやんけ

「使うにしてもどうやりや……ええい!!フレア展開つ！」

叫ぶと肩のフレアが動き出し、デコイを射出。ミサイルがそれに釣られて道を開くよ  
うに俺を避けていく

「しゃあっ!!行くぞオ——」

目の前が暗くなる。は？一体何が

ドシャアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「?!ふはつ!!……つ、は、はあ！はあはあはあはあ！！：はあ、はあ……」  
「おかえリストレイド」

「はあ……!はあ、はあ……はあ…はあはあ？」

「ああ、お前の最後か？ミサイルの衝撃で崩れたビルに下敷きにされて死亡だ」「ふへ……下敷きかよ……」

「い、いや、ですけど私なんて最初は動くことすらできませんでしたから、す、凄い

ですよ？」

「ああ、マリナちゃん。君はどこの天使でしょうか？」

「さあ二回目だとつととヘルメットを被り直せ」

「この悪魔。鬼、鬼畜……」

「どつととしろよ。ストレイド」

「はいはい、やりますよつと」

カポツと黒いヘルメットを被る。今度は武器をBFFの名銃、性能良し、ヴィジュアル良し、知名度良しの051ANRとマーヴを使う。背中はローゼンタール製のチエインガンと適当にミサイル

「……今度は痛みを感じない？……わけわかんないなあ……」

「そして、また砂漠

「とりあえずノーマルに向かつて銃を弾きまくるつ」

両手の実弾銃を撃つ。マーヴの反動は051ANRに比べるとかなりじやじや馬だが、アリーヤの腕がその反動を殺す

「うつし、次だ次ーーっ！ミサイル！！来たつ！」

「あ、てか俺クイックブーストのやり方知らねえし…………」  
今度は出し惜しみせずに肩のフレアを展開。そのまま

はい、乙一ぐわつ!?

「うだだだだだあ!!? ミサイル外れたからつてライフル撃つてキタアア!!?」

ノーマルACはミサイルが外れた途端手に持ったライフルで迎撃してきた  
「つ…………んなんああるおおおおおおおお!!」

ドンツツツツ  
!!!

衝撃という名の加速。マーヴを敵のACへと向ける。体が、何をすればいいのか分かつている…ようすに、頭で考えるよりも先に腕が動く、指を押して、トリガーを引く。目の前にいる3機のAC。右端が炎に包まれる、真ん中のACがライフルを撃つ。被弾するが突っ込む、腕を伸ばす、マーヴの先端がノーマルACのコアへ突き刺さる。そのままトリガーを引く。マーヴが反動で揺れるたびにノーマルACも痙攣しているように動く。もう一機は、腕に持ったライフルを蹴り上げる、その後でOGOTOを展開し、高速の榴弾を至近距離でブチかました

「はつははーい。俺覚醒（ドヤ）次の獲物はどいつだ……ん？」

あれ、画面が暗く……さつきと同じパターンかしら？

ドシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

# セレンの思惑

——ヒュパ・パ・パ・パ・パ・パ・ツツツ

幾つもの青白い粒が砂漠の地を滑っていく。それは、独特の音を走らせながら地面を抉っていく

「う、ぐつうう!!」

巨大な影が砂漠の真ん中に建てられたビルへと派手に突っ込み、大きな音を立ててビルが崩壊していく

ドゴン、ドゴオオオン……ヒュウツ……フオオオオオオン

ビルを壊しながら地面へ着地した巨大な影は、背中から緑色の粒子を撒き散らせて、あつという間に地平線の彼方へと消えいった

「はあ、はあ、はあ、はあ…………」

バチバチバチバチイイイ……ジジジジジ

「A P 60%減少……P Aは全部剥がれてる……ひとまず、ビルの裏に隠れて…………」

先端が尖った足の裏を使って、滑るように砂漠地帯を滑っていく巨大な影……ネクス

トACであるアリーヤが、前方に見えるまだ崩壊していないビルの裏へと機体を滑り込ませた

「マークのマガジンを交換して……」

ドヒヤアツドヒヤアツドヒヤアツ!!

「——っ!! 来た!!」

右手に持つたアサルトライフル、マークの銃口を、ビルの陰から少しだけ覗かせてトリガーを引く

ズドドドドドドドドツ!!!

マークの銃口からマズルフラッシュが幾重にも光り、弾丸が敵機へ奔っていく。

もともと当てるつもりはない牽制弾のために、それらはロツクした敵機と100mほど手前へ着弾していった

「背部ウエオポン……垂直ミサイル、発射!!」

右背部に載せた垂直ミサイルのコンテナから、数十発のミサイルが射出していく。それらはビルを超えて上空まで昇り、折り返すように急激に下降していく

ズドトオン!! ドガアアアアン!!

「当たった!……2、3発程度か?……」

ミサイルの爆発によつて敵機を中心に20mが黒煙に埋もれていた。

ビルから身を乗り出した俺は、右手のマーヴを無造作に構えて射撃を始めた  
ドヒヤアツドヒヤアツドヒヤアツ

「ちつ!! やつぱりかあああああ!!」

マーヴの弾が黒煙へ突入する直前に、鮮やかな青を基調としたアリーヤフレームの敵機「アクアドルフイン」が黒煙から飛び出してきた

ヒュパパパパパパパツツツ!!

アクアドルフインは背部に2基装備したパルスキヤノンを展開して俺の潜伏しているビルへ乱射し始めた。まだ距離が遠いこともあって射撃精度はあまり良くないが、ビルが倒壊するには十分な威力と弾数だ。俺は意を決して崩れそうなビルから飛び出した

ドヒヤアツ!! ドヒヤアツ!!

ズドドドドドドドドドツ!!

ヒュパパパパパパパツツツ!!

互いにQBを駆使しながらの高速戦、どちらも、手持ちの武器を撃ちまくるが、それ

らは掠ることなく全弾外れていく

「マーヴは……弾切れっ……な、らつ!!」

右手に持ったマーヴを捨てて軽量化を図る、そして左背部のグレネードキヤノン「O

GOTO」を展開して、アクアドルフインの進路方向を撃つ  
ドツツガアアアアアン!!!

地面へ榴弾を当てて爆風によつて敵の行動を抑制する。そして俺は左手に持つた  
レーザーブレード「ドラゴンスレイヤー」を展開して、もう1発GOTOの榴弾をぶ  
ちかました

「決まりっ!!」

『…………!!』

アクアドルフインは両手に持つた武器を盾のように自機のコアの前に翳した。左手  
に持つたマシンガン「ヒットマン」と右手に持つた超凶悪拡散バズーカが粉々に砕け  
散った。

そして、榴弾による直撃を喰らつて動きの硬直したアクアドルフインへ、とどめのド  
ラゴンスレイヤーを突き刺した

「―――、ふ、ふう―――、あ、―――疲れた……」

座り心地の良い椅子に座っている少年が、頭に被っている黒いヘルメットを脱ぎ捨てて椅子の背もたれに背中を沈めた

「お疲れ様です、ストレイドさん」

「あ、……うん、乙です、マリナさん」

椅子に座っている少年、ストレイドは、傍に立っている、鮮やかな青い髪の少女——同じリンクスであるマリナに笑いかけた

「や……つと、勝てたぜ……ははは」

「はい、やつと、負けました。そろそろお昼ですし食堂に行きませんか?」

パン、と両手を合わせてにこやかに微笑んだマリナに、ストレイドは了解、と呟いて席を立つた

「それについても、たつた数回でネクストを自由自在に動かせるなんて、驚きました。それに、時間も経験も先輩の私もすぐに倒しちゃいましたしね」

「よしてくれよ……照れる」

廊下を歩きながらマリナが人差し指を立てて先ほど行っていたシユミミレーションの乾燥を話し出す。だが、俺は得意なアリーヤを使って9回目でやつと彼女に勝つことができたので、嬉しさよりも悔しさが勝つてる状態だ

「さつきのだつて、OGOTOが当たつてなきや至近距離からWパルスキヤノンかマシ

ンガンと散弾バズーカ喰らつて死んでたよ」

「えへへ、それは結果論ですよ、現に負けちやいましたし」

マリナの乗機であるアクアドルフィンは、背部にパルスキヤノンを2基、手持ちにマシンガンと散弾バズーカと、肩にASミサイルを装備している近距離型だ。遠くからだとASミサイルだけのアプローチになるのであまりダメージは期待できないが、敵の懷に詰めることが出来れば、重量級でも数秒で溶かすことができる機体だ。

「そう言つてくれると助かる。セレンからは説教パートナーだからさ」

肩を竦めて溜息をこぼす。どうせあのバアさんはOGOTOがなんだ、レーザーブレードがなんだ、と駄目出ししてくる筈だ

「あ、マリナ少尉、此処にいましたか」

「ふえ？ あ、お、お疲れ様です」

マリナさんが慌てて敬礼したのを見て、相手の顔を見ると、その人物は青い戦闘服にイルカの意匠を象つたエンブレムを付けた部隊、リンクスであるマリナさんが率いるブルーシャーク隊の隊員だつた

「これから昼食……で、ありますか？ もし宜しければその前に数分程度、ノーマル部隊の連携について話したいのですが」

ブルーシャーク隊員の表情を伺うような顔を見て、マリナさんは俺を気弱な瞳でチラリと視線を合わせてきた。

「邪魔することじやない、と俺はこくり、と頷いた  
「わ、分かりました。私も参加させていただきます」

「了解です、マリナ少尉。時間は無駄に出来ませんから、早く行きましょう  
ブルーシャーク隊員がマリナさんの手を取つて通路を歩いていく、何故か去り際に俺を見てドヤ顔してきたが、あれは一体何だつたのか？」

「あはは、マリナはブルーシャーク隊のマスコットだから、残念だつたなー？・隊長」  
今度は俺を隊長と呼ぶ、甲高い声。またも俺は肩を竦めて振り返った  
「何が残念なのさ？」

「連れ合いが盗られちゃつた、てどこかな」

ニヤニヤと含み笑いをしている女……黒をメインに、所々に青いラインを入れた戦闘服、胸に見える黒騎士のエンブレムを付けた標準的より低身長の女性。名前をベル・ベルリオーズと言う……名前の通り、ベルリオーズの娘だ

「それで？そんな可哀想な俺にお前は何の用だよ、ベル」

このベル・ベルリオーズ、俺がベルと呼んでる少女は、ネクストを動かすAMS適正こそないが、ACよりも性能の良いハイエンドノーマルACを巧みに扱い、罠や地形、戦

略などを駆使し、時にネクスト戦力すらも撃破する強者である。かくいう俺もシユミレーションではこのベルに負け越している……無念

「うつわー普通自分の事を可哀想というものかね？隊長」

「うつせ」

ベルがにひひ、と笑いながら俺の肩に乗っかる。ついでに言うとこいつの容姿はとても可愛い。瞳はクリツとしていて、なおかつうるうると小動物のような印象を受けるが、性格はどちらかというと小悪魔的。

身体能力は高く、訓練を受けた男であろうと格闘戦では負ける事がしばしば、噂では現レイレナード1の格闘能力だとか……

そんなベルがなぜ俺を隊長と呼ぶのか、それは…………

亡靈と呼ばれるレイレナードが擁するリンクス直下のAC部隊、ガーディアン

リンクスが生身の際には襲撃者の撃退を主として、ネクストでの作戦後ではネクストの回収時、それを援護する事を目的としてセレンの案で編成された部隊なんでも、レイレナードが極秘に地下を作り、勢力の立て直しを図っている時にセレンが合流した際

「貴様らはネクスト戦力しか持ち合わせていないから負けるんだろうが、このバカ共め

！」

というありがたいお言葉を発したためにネクスト戦力＋ノーマル部隊で行動する、と  
いうものに変わつたらしい。

因みにノーマルAC戦力を手に入れるためにレイレナードの機動性重視を顕著に表  
したハイエンドノーマル「ファンтом」が開発されている……とベルに聞いた。

（正直言つてセレンの無茶振りも凄いけどそれをすぐに行動に移すレイレナードの奴ら  
も凄いよな……）

セレンから説教を喰らつて、急遽設計図から作り始めて半年で初めてのノーマルを完  
成させ、その三ヶ月後に強化版ノーマルAC、ハイエンドノーマルを造つたらしい。

如何に変態企業つても半年で0からノーマルを作るレイレナードの技術力にふざ  
けてるの？と言いたかった。

……いや、トーラスやらアクアビットやら有澤などの本当の変態企業に言わせれば  
半年でACなんてあんまりすごく無いことなのだろうか？なんかあいつらだつたら  
一ヶ月でコジマ系のナニカとか……有澤に至つては企業一巨大なAFを創りそうな気  
がする。

「それでさー、いつ独立傭兵として活動するの？たーいちょーう。そろそろ地下は飽き  
たぜ！」

ぶらんぶらんと肩にぶら下がりながら問いかけてくるベルにデコピンを喰らわせる。

が、それはすんでの所で避けられてしまった……この高性能幼女め  
「ネクストすら本格的に動かしてねーのに仕事なんて出来るわけないだろー？つたく。  
そんなの誰から聞いたんだよっ」

「…………え」

「…………え？ なにその、お前知らないの？ 的な…………え？」

…………え？ なに？え？え？え？俺抜きでナニカ話が進んじゃつてん  
の？え？嘘でしょ？」

「お、おつととお！ 食堂に着いちゃつたぜたちよー！ 早いところご飯でも食べよーう  
よーう」

なんだこいつ、いきなり白々しく話題変えやがつて…………まあ、この話は後で根掘り  
葉掘り聞いてみるとして

「どりあえず俺は牛丼でも食うわ」

「食一べるねえ！」

この世界では肉や野菜、魚などを思いつきり食べられる環境は少ない。

地上なら少しあるだろうが——空、クレイドルでは朝から晩までクツソ不味いサ  
プリメントやらゼリー状の栄養食やら食べさせられるらしく、天然物、というか人工の  
物でも食料は貴重なものとなつてゐる。

しかし、レイナードではファームと呼ばれる独自の農場で、所狭しと果物、野菜、魚や牛、豚などを育ててているために食糧問題はあつけないほどに解消されている。しかも、その食糧はあまりにも数が多くすぎて、地下をいくら掘つてスペースを作つても足りないほどでセレンのツテを伝つてインテリオル・ユニオンに（多額の値で）卸しているそうだ。なので俺はこの世界では贅沢と言える牛丼などを思いつきり食つている

「この後、飯食いながら今の話をじっくり聞かせてもらうからなあ？」

「ええー？ な、なんの事？」

「……………残念だ、お前のために心優しい俺がプリンでも作つてやろうと思つたんだが…………」

「え、ええええ!! す、す、す、ストレイドのプリン——!! い、言う!! 言うからプリン作つて——！ お願いい！」

よし、こいつは俺のプリンで釣れるからちよろいんだよな。後はこいつから話を聞いてセレンに直訴だ……ボコられる結末しか見えねえな……ハハ……

### ——セレンババアの部屋

セレンババア（大事なことなので二回言いました）の部屋、其処にはセレンババア（大事なことなので三回言いました）を含む複数の男女が佇んでいた

「……セレン、本気なのか」

その中の一人、ベルリオーズが壁に寄りかかって腕を組み、顔を顰めながら部屋の主であるセレン・ヘイズへ問い合わせた

「当然だ、ベルリオーズ。私が冗談を言つてるようと思えるのか」

そして、ベルリオーズの問い合わせに、憮然としたセレンが返す。

その答えを聞いたベルリオーズは、ある一人の少年を思い浮かべて重い溜息を吐いた  
「…………そうか、だが……」

「ベルリオーズ、このババアは耳が死に腐れてやがるから人の話を聞くわけねえに決まつてん——」

ベルリオーズよりも少し程若い男の声が、威勢良く毒を吐き、続いてドゴ、バキツ、といふ誰かが殴打する音とグハツ、グフユ!?お、俺の所為かよ……と、誰かの吐血音と捨て台詞を残してドサツと倒れる音が部屋に響き、部屋が静かになる

「…………アンシールは、ただの自業自得として。本当にストレイドで行くのか、セレ

ン

平坦な声に僅かに女性らしさの残る高い声でソファに座っているP・ダムがセレンを見る。セレンの方も、アンシールをボコボコに足蹴して部屋の扉から蹴飛ばした後でP・ダムを振り向く

「不満か」

「いや、マリナじゃないのか…と思つたまでだ。気にするな」

気にするな、と言つておいて、P・ダムのセレンを見る目は彼女にしかないコジマの煌めきがある。元は水晶のように透き通つた碧眼がコジマ粒子を体内に取り込み過ぎた影響で美しい碧い瞳の中に微量のコジマ粒子が漂つているのだ。

そして今、その瞳がセレンを咎めるようにゆっくりと細められた。

「…………誰がなんと言おうと、私はストレイドを独立傭兵のリンクスにする」

その日から逃れるように顔を伏せたセレンが、凜とした声音で部屋にいる者達に告げた。

「ふう…お前が決めたのならそうしろ。セレン」

「疲れた、私は寝るぞ」

「お、オーラ…アンシール？お前生きつてかア？」

「く、くく、クソ…ババ…ア…（ガクツ）」

ベルリオーズが溜息と共に吐き出した言葉を合図にそれぞれがセレンの部屋から退出していく。

ベルリオーズはズボンのポケットから出したスケジュール表を眺め、P・ダムは自分の部屋に帰ることすら面倒くさいのか、セレンの部屋のソファに寝転び、オービエはピクピクと痙攣しているアンシールを片手で担ぎ、更にセレンの命令でP・ダムも背負い……ぶつくさと部屋を出る

そして、誰もいなくなつた部屋の中に、主であるセレンが一人、ソファにどつかりと腰を下ろし、備え付けの冷蔵庫から缶ビールを2本をテーブルの上に置いて、シンプルイズベストの部屋に、唯一置いてある写真立てを眺めてこう言つた。

「…………ストレイド…………これで私に必要なイレギュラーが揃つた…………私は…………必ず…………企業の…………奴らの創つた秩序を破壊してみせるさ」

写真立てに写る、年若い二人の女性へ語りかけるように独り言を呟いたセレンは、次に缶ビールをグビグビと飲み干した。

そして、ほろ酔い加減のセレンが、写真の向こうで無愛想な顔の若かりし頃のセレンと並んでにつこりと微笑む、昔の後輩へ告げた。

「そして人は、揺籠で空を飛び続ける……か……。そんなもの、絶対に許しはしないさ……なあ、そりだろう?……”エイ”……」

飲み干した空き缶をバキバキと、片手の腕力だけで潰したセレンは、今は亡き嘗ての後輩へと、プルタブを開けた缶ビールの中へ、地下レイレナードで農場ファームを経営する青年から貰つた造花の桜の枝を、そつと沈めた

「……つ、バカ野郎が……」

# リンクス管理機構 カラード

「…………ふあくああ…………ん、んーっ！」

ベットの中で目が覚めた俺は、体を起こして勢いよく伸びをする。俺はここに転生？する前も朝は大体強く、親に起こされるといったことはなかった。そしてそれは基本的な習慣として今も続いている

「あー…………それにしても…………マジで独立傭兵になるのか…………早すぎるだろ…………」

どんよりとした表情で、昨日ベルからプリンと引き換えに聞き出した情報を思い出す。

それは、近々セレンが俺を独立傭兵に登録して、カラードのリンクスとして働くかせること。

そのための仕事道具とも言えるネクストは、大体決まっており、後はG A、インテリオル・ユニオン、オーメル・サイエンスのどちらかから支援を受けるか、もしくはこれから全く支援を受けずに独立傭兵としてやっていくかで使えるネクストが決まるだとか……

「まあ、使うとしたらアリーヤ一択で独立傭兵だけど」

それはつまり何処からの支援も受けない、ある意味茨の道を進む、と言うものだ。

これによつて使用する初期機体は、旧レイレナード標準機である03-A ALIYA Hとなる。

「別に、オーメルの初期機体は面白くないし、インテリオルは腹黒だし、GAの機体はコジマがマズイ……しアリーヤ自身のヴィジュアルがカッコよすぎてEN管理のキツさとか被弾時の修理費とか気にならないから別にアリーヤで良いんだ……」

ただ、初期武器はマシンガンのヒットマンじゃなくてアサルトライフルのマーヴが良かつたなー。とか思つてたりして……

コンコンツ

『おい、ストレイド。私だ、入るぞ』

初期機体の事で悩んでいると、部屋の扉から小気味良いノックの音と凜とした女性の声が聞こえる。

誰? と聞くまでもなく、セレン・ヘイズその人だろう。俺はベットから立ち上がりつて黒い半袖のパークーを羽織つて扉を開けた

「……遅い」

「朝の第一声がそれかよ……」

朝起きて最初の訪問者が不機嫌な声で苛立ちを口にする

「ストライド、今からお前のリンクスネームをカラードに登録しに行くぞ」

続いて出てきた言葉に、俺は遂に来たか…と、生睡を飲み込んだ

「マジですか？セレン。俺、未だにネクストを動かしてもいいんだぞ」

「そんなものはこれから覚えれば良いだろう」

あ、ダメだ。この人やつぱり人の話を聞いくれないスタイルだわ。正に暴君。弱肉強

食の頂点に立つ女…!!

「…………何か変な事を考えているな」

「いやいやいやW滅相もございませんハイ」

なんとか笑い飛ばして誤魔化そうとしたら喉元に鋭いナイフが迫っている感覚に襲われた。うわー、何この人殺氣か何か飛ばしたわけですか？

「まあいい、さっさと準備をしろ。私はベルを呼びに行くからその間には終わらせておけよ」

「……りよーかい」

セレンにギロリと凄まれた俺は、弱々しく返事をして出発の準備をする

そして数分後、ベルが警戒されない程度に服の下に戦闘服を着込み、コンバットナイフ、近接戦闘用ハンドガンなどを装備して俺の部屋に突つ込んで来たので、適当にチヨ

コレートを餌にしながらセレンが操縦するヘリに乗つた。もちろんこのヘリの行き先はリンクスの集まるカラードだろう

「……なあ、セレン。俺がリンクスになるのはもう避けられない事実としてさ……ネクストはどうするんだ？」

「お前の機体なら既に手配した……ベルリオーズとレイレナードの技術者に感謝するんだな」

「それ、手配したつていうより強引に作らせたつて言うんじや r y  
「ねねつ、カラードつて何いー？」

ひよこつと頭を出したベルが軽快に体を動かして俺の膝の上に座る。俺は背中にからつて來たりユツクからビーフジヤーキーを取り出してベルの口に突っ込む

「……彼処に行くまで時間はある、簡単な説明でもしておくか」

セレンがヘリの操縦をオートに切り替えて席を立つ。一度後ろに行つて、手持ちのハンドボードを持ってきてリンクス管理機構：通称カラードについて簡単な説明を始めた

カラード……それは、過去作品のレイヴンズネストに代表される“レイヴン斡旋組織”とほぼ同等のもの。つまりは、ACfA版レイヴンズネストだ

?この組織は、リンクス戦争の教訓からか、企業が直接リンクスを所有し運用する方式を改め、カラードを介した共同管理とした

?…………まあ、実際は個体依存性への危険性を知りながらも、捨てるのできないネクスト戦力の魅力、ネクスト無しとした場合の対ネクストへの企業の恐怖感など矛盾への妥協の結果でしかない

?しかし、年月の経過と共にその機能・存在意義は薄れ、既に形骸化しており。現在では実質的な企業専属リンクスがカラード内に多く存在している。?ちなみに、本組織内でのリンクスの能力を示す順位としてカラードランクが存在するが、実力的に最強クラスのホワイト・グリント(恐らくAC4の主人公のアナトリアの傭兵)がNo.9になつ

ていたり、政治力に長けたオーメル・サイエンスのリンクスであるオツツダルヴァ（もしかしながら水没王子）が、カラードランク1となっているなど、リンクスの実力に企業の意志が介入するところとなつていてる？なお、ORCA旅団メンバーなどのカラードに所属しないリンクス（イレギュラーリンクス）もいる

「…………という事だ、何か質問はあるか」

「ない」

「うん、大体わかつた」

「そうか、それなら次はストレイドの機体について説明しておくか」

リンクス管理機構、カラードの説明を終えたセレンが、ヘリに備え付けられた冷蔵庫からドリンクを取り出す。俺とベルにも二本缶ジュースをくれる

「あ、グレープだ」

「…………俺は…………メロン…………ジユースか？これ」

ベルに手渡されたのはどうやらブドウジュースらしい。しかし、俺が受け取ったのは魅惑的なコジマ色を放つメロン？ソーダだった。

なぜ、俺がこの緑色の缶ジュースをメロンソーダかどうか判別し兼ねない理由は……  
「なんでソルディオス印なの……」

缶ジュースにデカデカとデフォルメされたソルディオス砲がプリントされているからだ。

ちなみにというか、やっぱり製造元はトーラス。しかも使用している材料の中にはコジマやらコジマ100%やら書いてある。包み隠さず真実をさらけ出すスタイルには俺も高評価を付けるところだが、ソルディオス印の真下にこれまたデカデカとコジマやらコジマやらコジマやら書かれてるので一層不安になる。

しかもキヤツチコピーが新しいコジマの可能性。いつたい誰がこんな狂氣のシロモノを生み出してしまったのだろうか

「なあ、セレン」

「いや、私は知らんぞ」

綻る目つきでセレンを見ると、フイツと視線を外された。もしかしなくても俺を見捨てる気なのだろう

「まあいい、さつさとお前の機体について説明するぞ」

そう言つてセレンが取り出したのは、俺が生前使っていたスマートフォンのような、小型の薄っぺらい板のようなものだ。

それをセレンが軽く弄ると、ピピピッ、という音を鳴らせてホログラフィーが浮かび上がる

「お、アリーヤー！」

若干ノイズ混じりの光の像が、徐々に形を変えて見慣れた俺の愛機、アリーヤを形取る。

そいつは、右手にマシンガンのヒットマンではなく、レイレナードの傑作と呼ばれた突撃ライフル、04-MARVEを持ち、左手には、やはりレイレナード社標準のレーザーブレード、02-DRAGONSLAYERドラゴンスレイヤーだ

「…………あれ、マーヴ？ヒットマンじゃなくて？」

俺としては嬉しい事だけど、一体どういう事だ、もしかして原作が変化しているのか

？

「ああ、マシンガンを奴らに作らせようと思ったが、ベルリオーズが使つてたマーヴを使えば経費削減出来るからな」

「ああ……そういう事ね」

つまり、リンクス戦争の時にベルリオーズが搭乗していたネクスト、シユープリスが使つていたマーヴを俺が乗るアリーヤに搭載させたんだろう。

確かにそれなら新しいヒットマンを用意する事もなくなるけど：

「リンクス戦争の時のものだろ？ガタが来てない？」

「奴らとベルリオーズの整備に抜かりはない。安心して使用しろ」

奴ら、はやっぱりレイナードの技術者達だろう。それに、もしかしてベルリオーズも整備が出来るのか？

「分かった、背部兵装はどうなつてんの？」

「軽量型のプラズマキャノンを載せている」

「ああ、そつちは大体同じなのな」

「…………？ どういう意味だ？」

「ただの独り言だ。さーって、内装も見ていこうかなー」

しまつた、アセンブルに対しても思わず口が滑った。セレンも怪訝な顔で俺を見てる……だ、だつて……だってあの軽量型プラズマキャノン。初期ジエネとかメインブースターとか……初期の内装じや使えるタイミングなくて実質死んでんだもん!!!!むしろ最初がとてもキツイのは考えなしに積んだプラズマキャノンの所為だろ……アリーヤフレームは消費ENが激しいんだからレーザーブレード以外は極力実弾系で行きたいんだよ

「内装は全部アリーヤ……か、うん、まあ…イケるか」

「プラズマキャノン外せば幾らか余裕が出来るはずだ。でもまあ、最初はかなりキツイな。」

消費EN管理から、まずドラゴンスレイヤーはあんまり連発出来ないし、マーヴはス

テータスが全て高水準でライフル系でトップクラスの瞬間火力を持つてゐるけど、代償として総装弾数が圧倒的に少ない。まあ、オーメルのAR-700よりかはすこーしだけマシだけだ

「…………そろそろ、カラード本部に着くぞ」

初期機体のアセンブルについて考えていた俺の耳に、セレンの声が届く  
「そうだ、お前の機体名を決めておけよ」

「え、あ、うん」

そうだった。確かゲームじや機体名がストレイドでリンクス名がホワイト・グリントと同じUnknownだつた。

それがこの世界では俺の名前がストレイドになつてるから機体の名前がUnknownになつてゐるのか

「名無しじやあ、せめてもの格好がつかんからな、よく考えておけよ」

「分かった」

セレンの凄んだ声に厨二病な名前でいこうと考えていた俺は肩を竦める。どうやら俺の考えは見抜かれていたらしい。

…………それとも、セレンが厨二病な名前で失敗した同僚を知つてゐるのか、もしくは過去に自分が失敗したのか

「うつし、まずは名前決めだ」

何がいいだろうか？俺は貧弱な語彙を搔き集めてフルアリーヤフレームの愛機に名前をつける事にする

「うーんと……剣……剣……剣」

ソード…？うーん、ソード・アート・オンラインが浮かんでしまった…あれ好きだつたんだよなあ…新刊出る前に死んでしまったからもう読めないんだけど…

「ソード、サーベル……うん？」

そういうえばモダンウォーフェアってゲームにセイバーってキヤラいたな。確かセイバーって剣つて意味だったし、これで行くか

「…………F a t e のキヤラが出てきたような気がしたけど気にしない気にしない……セレーン、機体名決まつた」

セレンに声をかけると、どうか、と小さく呟いてスマホみたいなホログラム投影機を寄越してきた

「そこに記入しろ。あとは私がカラードで登録しておく」

セレンのぶつきらぼうな物言いに、うへえ、と肩を竦めて機械を弄る。

扱い方が分からず、途中ベルにも教えて貰つたりして、なんとか機体名に『シユヴアルツセイバー』と記入した。

「シユヴァルツセイバー：黒い：剣……か」

シユヴァルツ、ドイツ語で黒という意味だ。何故この単語を入れたかというと、ISというライトイノベルのヒロインがそんな名前の機体を扱っていたからだ。断じてパクリではない……筈だ

「黒騎士隊にお似合いだね」

黒騎士隊、それは俺が率いる予定のAC部隊。発足して時間が経つていないのでメンバーはベルだけだ。しかもセレンに言わせると、追加のメンバーは期待するな……らしい。

レイレナードから離れて独立傭兵として各企業の動向を見ていく中で、大所帯は動きが悪くなるためにできる限り少數精銳で行くらしい。

機体の整備を受け持つ整備士や技術者は後で追加するらしいが……

(そういえば、なんでセレンは企業の動向を監視する……なんて言つたんだ?)

ゲームではあまり興味が無いように感じたけど……?むしろ監視するっていうより何か不備あつただけで積極的に喧嘩売つていくスタイルだった筈だけど?

(ま、セレンのことだし、俺には関係無いかな)

どうせセレンに末長くこき使われる人生だと今の時点では予想……プラス後半からORCA旅団の一員としてクローズプランを進めていく!……予定。てか、テルミドール

にもし誘われなかつたらどうしよう。

「ストライド、ベル。着いたぞ」

「おっおお！ここがカラード？」

考え事から頭を切り離して窓から外を見る。

そしてカラードのスタッフから誘導を受けてセレンが見事な腕前で着陸。俺とベルが先に降りる。

私はヘリを格納庫に置いてくるから先に行け、とセレンに言われた俺とベルは、田舎リンクス丸出しだおずおずと、リンクス管理機構「カラード」本部の中へと入つていつた

「へえーへえー、ここがカラード…ねえ」

ベルを連れてカラード内部を練り歩く。

リンクス管理機構、と言つても、実際には多くの一般職員が働いていたり、小洒落たカフエがあつたり、面白そうな小説やライトノベルを販売する本屋があつたりと、前の

人生の世界とあまり変わらないようだ

「おい！GAのスマイリーにローゼンタールのダリオ・エンピオが絡んでるぞ！」

「ええ！まさかよ！面白そうだなつ！」

「ん？なんだあー？」

突然周りが騒がしくなる

「早く行こうぜ！」

「場所はどこだ!?」

「アリーナだつてよ！」

「……スマイリー……と、ダリオ・エンピオ？」

まず、GAのスマイリーは、そのままメイ・グリンフィールドだろ…？そして、ロー  
ゼンタールのダリオ・エンピオ……あのザツコイ敵かあ…？。あいつカスすぎて印象に  
残らないっていうか……コジマフルチャージで開幕終了させたからあのミツシヨン自  
体あんま覚えてないんだよね

「ん、まあでも、楽しそうだから行つてみるか！もしかしたらあのスマイリーに会えるか  
もだし！」

カラードランク18、GAのリンクスで愛称をスマイリー。本名をメイ・グリン

フィールドという彼女は、GAのミッショントを受けたリンクスであれば、100%の確率で自身の僚機に選び、かつACfA萌えリンクス三人娘の中でNo.1の嫁認定萌え力を持つGAの若きリンクスである。

実際俺もメイにはなんどもお世話になつた。アルゼブラの蜘蛛女と二代目ハラシヨーとの戦闘でも自分の不利を承知でメイを選んだと言つても過言では無い。

まあ、ぶつちやけあの蜘蛛女は面倒だからコジマでPA剥がしてグリントミサイルとAAで潰したけど。

「そんな彼女がローゼンタールのチンピラ（笑）に絡まれてる！」

カラードランク11、ローゼンタールのリンクス。名前をダリオ・エンピオ。

この男、非常に小物のかつすいチンピラである。協働で僚機にするとしてもネクストサベージビーストを駆る大言吐きで知られるカラードランク22のリンクスのカニスよりも弱い。10も下のリンクスよりも弱い。くつそ弱い。しかもお茶会と呼ばれるイベントでは全員から無視されるという……なんとも可哀想な（笑）リンクスだ。

「まあ（笑）ダリオとの対戦だつたらマーヴとドラゴンスレイヤー装備のアリーヤでも楽勝だわ（笑）」

むしろあんな機体で11までいけるとか（笑）メイの使用するメリーゲートでも楽勝に勝てるつて（笑）

「じゃあ、そのダリオなんとかと対戦してみようぜーい、たいちょー」「ん？」

「たいちょーだつてもうリンクスになんだしさあ？一気にランク11の奴に勝つたら他の企業からも注目されて、もしかしたらセレンも褒めてくれるかもよーう」

「……確かに、それに対戦で勝つたら多分金結構貰える筈だ……いよっし、そんじやあローゼンタールのチンピラから金を追い剥ぎしてみるか？」

そして俺、そのお金でアリーナの内装を変えたり色々やつてみるんだ。

しかもメイを助ければならぬ縁を待つかもしれないし？メイを通じてG A の優秀な子会社でミサイル販売に圧倒的なシェアを持つM S A C からグリントミサイルを買えたりしてね？夢は持つだけなら無限大だ。よし

「いつちよカラードの上位ランカーをボコボコにしてやるか！」

元から負けるつもりなど無い。不敵な笑みを浮かべた俺は、ベルと一緒に騒ぎの起  
こっている場所へ駆け出した——

カラードランク11のゴミ虫とランカー戦？いーいじやん！

「こんなところで会うとはなあ、メイ・グリンフィールド……ハハハハハ」  
「ローゼンタールのN.O. 2が私に何の用かしら」

リンクス管理機構 カラード、その内部にあるorderマッチ専用の特設施設、通称アリーナに、大柄で面相の悪い男と、緑色の髪に、でるところは出て引っ込むメリハリの効いた魅力的なスタイル。

胸の核ミサイルは実用性と芸術美の両方を兼ね備えている。正にワンドフルボディなスタイルの少女がいた

「フン、GAの若いリンクスがカラードにいるからなあ、俺がネクストの操縦技術について教えてやろうと思つてた所だ」

態度は常に横柄で上から目線、加えて人相が悪いチンピラのような格好をした男、ローゼンタールのリンクスであるダリオ・エンピオが、目の前に立つGAの女性リンクスであるメイ・グリンフィールドの肢体を、上から順に舐めるように眺め、彼女の2発搭載の核ミサイル（意味深）と下半身の秘部に視線を移してにんまりと口角を釣り上げ

る

対照的にメイ・グリンフィールドはと、そんな彼、ダリオ・エンピオをゴミ屑を見るような目つきで忌避し、舐めるようにじっくりと見つめられて鳥肌が立つた自分の肢体を守るように、腕組みをして気丈に振る舞う

「クハハハハ、良い具合に育つた身体だな、メイ・グリンフィールド」

「貴方にそんな事を言われても嬉しく無いわね」

むしろ鳥肌が立つほどなの。メイは内心でその言葉を捻り出した。彼女の身体は、ダリオに気持ちの悪い視線を向けられて気持ちの悪い言葉で褒められた途端に、今まで幾度も感じて来た男の何かを期待するような気持ちの悪い寒気に襲われていた

「クックツク、まあそう言うな。そんなに怖い顔でいると、せつかくのスマイリーも台無しだぜ」

メイの表情を見て更に口角を歪めたダリオが、ペロリと舌なめずりをしてメイの感情を支配するように言葉を選ぶ。

メイはそれが分かつていながらも、自分の愛称であるスマイリーとは反対に、眉を顰め、口をへの字に硬く縫い、ギュッと自分の身体を抱き締める。そして彼女の声も何時もとは違う、滅多には無いが相手を威圧するような低い声へと変わっていく

「私は今日貴方に会いに来たわけじや無いから」

ダリオにらそう告げて踵を返したメイの腕を、ダリオの太い腕がガツと掴んで万力の  
ような力を込める

「ツ、痛……」

その力強さに思わずビクッと身体を震わせて足を止めたメイに、ダリオの気持ちの悪い  
い囁き声と大柄な身体が、メイの標準より少し高い身長に迫る

「メイ・グリンフィールド、俺はお前を高く評価してるつもりだぞ」

だから何よ。と内心で吐き捨て、メイはギリギリと自分の片腕を握り締めるダリオ  
の手を忌々しそうに睨み付けて助けを求めるように周りを見回した。

だが、周りにいるのは全員がカラードのスタッフであり、彼らは元々ローゼンタール  
の野心家がGAのスマイリーに絡んでいるのを面白そうに見てるだけの野次馬で、リ  
ンクス管理機構の名前の通りにリンクスの体調管理やアフターケアなどの目的以外で  
リンクスに近づき、気分損ねたり、リンクス達と何らかの問題を起こす気は無い。その  
ために今ダリオとメイの間に入つてダリオの怒りを受けようとは者は誰一人として存  
在しなかつた

「なあ、メイ。お前はどうなんだ？ククク、このカラードランク1-1の俺の事はよお」  
グイツとメイの腕を持ち上げて強引にメイを自分の側へ持つてきたダリオが、彼女の  
耳元で囁いた

「はいはいどいてどいてー」

「通るよーう」

ざわざわと騒いでいる人混みから元気な声が聞こえる。それはどうやらメイとダリオの所へ近づいているようだ

「あ、見ろよベル。あの緑髪の女の子の腕を掴んでるチンピラがダリオ・エンピオだぜ。  
……………多分」

「ああ?」

人混みの中から聞こえた自分の名前とチンピラという単語にダリオが反応して声を荒げる。せつかくGAのメスガキを弄んでいたというのに、乱入するとはとんでも無い奴だ。

ダリオはチッと舌打ちをして人混みへ視線で合図する。

「この俺をコケにした馬鹿はどういつだ?」

……………と。そしてその視線を受けた大多人数の野次馬たちは、そのバカの巻き添えを喰らわないようにバカと数メートルほど離れる。そしてそのバカーストレーデとベルが真つ二つに割れた人混みの中から現れた

「てめえか、俺をコケにしたバカは」

「コケにした?ん、まあお前のトラセンドって、案外ザコだよね♪って話はしたけどね。」

まあそう落ち込むなよ。ローゼンタール2位でも頑張ってる方じゃないの?リンクス2人しかいない中で、だけど

「ふふ」

ニコニコと笑顔で毒舌を吐いたストレイドに、メイが思わず笑ってしまう。

対してダリオ・エンピオは額に青筋を立ててストレイドを睨んでいた

「ん? どうした? おう? おう?」

それを見たストレイドが更にダリオを煽つていく。その光景にメイが自分のお腹と口に手を当てて必死に笑うのを堪えている

「クソガキがっ!」

遂にブチ切れたダリオが太い腕を思いつきり振り上げてストレイドの顔を殴りつける。しかしそれはストレイドの傍にいた少女の手によつて受け止められ、逆にその少女にダリオが背負い投げを喰らう羽目になつた

「カツ……ハツ……!」

「おー、ナイスな背負い投げ

「だろーう?」

「ど、こ、ろ、で。ねーえダーリオさあーん。ここまでコケにされたわけですかー」

ダリオが見事な背負い投げで床に転がつてゐる様をカラードの職員たちが指差し、囁

し立て、徐々にその騒ぎが大きくなつていく。

そしてなんとか起き上がりろうとしているダリオの傍にしゃがみ込んだストレイドが、小憎たらしい笑顔でこう言つた

「今から俺とネクストで戦わね?」

「す、スミカだ……オリジナルリンクスの霞スミカ……！リンクス戦争後に突如失踪したつて聞いてたけど……生きていたのか」

「霞スミカの顔なんてよく覚えてたな……お前……もう、数年も前になるだろ？」

「バカ野郎ッ!!俺はスミカ様の追つかけだつたんだよつ!!俺の部屋に飾つてる企業級レベルのスミカ様グッズを見せてやろうか!?なんと!スミカ様の脱ぎ捨てスーツだぞ！」

「アツハイ」

カラード職員のヒソヒソ話が耳に入ったセレンは、顔を攢めて舌打ちをする。変態共が……。苦虫を噛み殺したような顔で呟き、セレンは待ち人を待つ

「よお、セレン」

「…………遅いぞ、貴様」

「ハハハツ！ ゴメンゴメン、いやホント。朝からキヤロリンの調子が悪くってねー」

彼女の底知れぬ殺意を飘々と受け流した人物。上下ともに青いジャンバーとジーンズを履いた、セレン曰くいつもニヤニヤとしていて考えの読めない奴——名前は風の噂すらも耳にした事はなく、そのくせ企業からは“主任”と呼ばれている男にセレンが鋭い睨みを効かせる

「お前の言葉はどうにも信じられん」

「ハハハツ！ そりやヒドイ」

セレンのストレートな皮肉に両手を広げたオーバーリアクションを取る主任。それを見てセレンが更にイラついていくのだが……主任はそれすらも愛おしそうに、楽しそうに、優しく目を細め、セレンの表情をじつと観察している

「それで今日は一体なんの用だ」

先ほどのセレンをからかう感じの掴めない男の雰囲気から一転、顔から笑みを消した

主任がセレンに問いかける。

それを見てセレンも口をへの字に閉じて本題へと入る

「フェリチタは…どうだ」

「ハハハアツ！そんな顔しちゃつて！このツンデレババアめエーーryアツゴメンナサイ嘘です拳銃しまつて下さいナンチャツテ……あいつならいつも通り神出鬼没：だな、セレン」

本題に移つた瞬間ニマニマとした表情を浮かべて急に万歳する主任へゴミを見るような目で腰からデザートイーグルを取り出して主任の額にグリグリと押し付けたセレンに、さしもの主任も冷や汗を垂らして真面目に答えを返す

「連絡を取らん限り何処に居るかも分からん。それに何時も腹ペコ娘だ、それでいて目の下には隈が出来放題、そして異常にネクストに取り憑かれていて」

「イレギュラーたる実力を併せ持つ……か」

「セレンの所のマリナちゃんぐらいのお料理スキルがあれば可愛げあるんだが、アレはダメだな。キャロリンと同等かそれ以上か……」

ククク、と思い出し笑いをする主任に、セレンもまたフェリチタとという名前の少女が作る料理の味を思い出していた

「何かを焼けば最終的には全てを焼き尽くす。弱火で炒めるだけで焦がし尽くす。砂糖

と塩を本気で間違える。ククク、ギヤハハハハッ！最高だ！あいつはアー！！

身をよじつて笑い声をあげる主任に、セレンが肘鉄をかます。当然それは主任に大タージを与え、彼はゲホッゲホッと大きく咳き込む

「さ、流石だ……これが人類の可能性……なのかも知れん…………ぐつ……！…………流石にこれ以上はこの身体にかかる負担が重いか…………」

「おい」

「ギヤハツ！そんな顔すんなよスミちゃん。俺も今死ぬ気は無いんでな、てへペろ」

「…………まあいい、それでフェリチタにネクストを与えたのか」

「ネクスト？ああ、アレね。まつ！なーんていうの？プレゼントって奴？気に入つてくれてるといいケド…………それで、お前の所のイレギュラーはどうだ」

目まぐるしい速度で変わる主任のテンションに、セレンが呆れたようにため息を吐く。

やはりこいつのテンションには追いていけん……。この話はさつさと終わらせるに限るとセレンが話を進める

「リンクス名もネクストチームも登録している。今カラードの何処かをほつき歩いているだろう」

「ア……？それちよーっとヤバいんじゃないの？今日はカラードにあの女が来てるケ

ド

「…………なに?企業の:あのイカれ女か?」

「そうそう、あのクレイジーサイコレズ。GAのメイ・グリンフィールドが来る予定つてだけでカラードまで来たんだと……どうする?」

もちろんさつさとストライドを確保してトンズラするに決まつてるだろう。とセレンが主任の腕を叩いて歩き出す。  
——その時だつた、2、3人ほどのカラード職員が笑いながら何処かへ走つていくのを目撃したのは

「おい、ちんたら走つてんじゃねえよ!今、ローゼンタールのダリオ・エンピオと無名のリンクスがアリーナで戦闘してんだからさあ!!」

「無名のリンクスがカラードランク11のゴミ虫と戦闘だつてー?ハハハツ!面白そうで中々良いんじやない?」

「ちつ、あのバカ犬が……さつさと行くぞ!主任」

盛大に舌打ちをしたセレンが主任を置いて本気の走りで駆け出していく。

それを後ろから見ている主任が、クツクツク、と笑いながら……やがて、ゆっくりと口を開く

「企業、革命、天敵……。あらゆるルートから現れたイレギュラーと同じ時代に衝突する

時。其処に障じるのは人類の可能性か……はたまた人類の救済か……それとも  
…………」

主任はとても楽しそうな笑顔を顔に浮かべていた。

本来の世界の理を捻じ曲げてまで実現させたこの世界。

管理者の手によつて互いに喰らい合い殺し合い破滅し合うように仕向けられた3人のイレギュラー。

自分は、本来なら管理者によつて作り出されたこの戦いの答えを見届ける者。

3人のイレギュラー達には自分たちの管理とは違う場所で盛大に戦つてもらわなければならぬ。

それが、戦いこそが人類の可能性という一つの答えであれば——

「ククク……これだから面白いんだ……人間つて奴は…………」

「……おい！なにしてる主任！早く来いこのノロマがつ！」

セレン・ヘイズという興味深い女の罵り声を聞いて更にニマニマとにやける主任。

そして彼は身体中のアドレナリンを活性化させて大声でこう叫んだ——

「よーしーおじさん頑張つちやうよー？ギヤハハハハハハハハハハ！」

—————と

そして、時を同じくして1人の少女がアリーナの観客席に座るメイ・グリンフィールドの背後から、彼女が胸にぶら下げた2発の核ミサイル目掛けて飛びついて行く

「きやつ！」

「ああ……この何時までも揉んでいたい触り心地……爽やかに香る髪の匂い。初々しい

反応……ゾクゾクする……！」

「や、やめて……”アイリス”……やあ……//／＼

そして、別の観客席からはメガネをかけ、黒スーツ姿の女性と、その傍らに立ち、ヴァーチャル戦闘システム アリーナの戦闘状況を食い入る様に見つめる少女

「あのネクスト機が、貴女と同じイレギュラー個体です。——”フェリチタ”」

「……シユヴァルツ…セイヴアーと、それを駆る……ストレイド」

そして、このコジマで汚染し尽くされたこの大地で、これから自分の他のイレギュラー2人と戦っていくなど、夢にも見ていないストレイドは、目の前に対峙する全距離

での戦闘を選ばない機体 トランセンドと相対し、左腕の龍殺しのレーザーブレードを開しながら、歯を剥き出しにして嘲笑う

「そんな機体で勝負する気か？舐められたものだ（笑）」

——と

そして戦いの火蓋は切つて落とされる。

たつた1人、企業にも革命にも天敵にも成れる男は、果たしてどの道を歩んでいくのか。

今はまだ、その答えは分からぬ——

勝つて勝つて最後に負けるらしいです

旧ピースシティー

平和の都市の名を冠する砂漠の廃都市。

幾多ものビルが連なり、そのどれもが砂漠の中に埋まつた場所に、カラードランク1でローゼンタールのリンクスであるダリオ・エンピオが駆るネクスト トランセンドが辺りを見回しながら立ち尽くしていた

「…………あのクソガキ、一体何処に行きやがった」

憎々しげに呟くダリオの頭には、散々自分を馬鹿にしやがつたストレイドとか言うクソガキの顔が浮かんでいた

「チツ、あのクソガキ。アリーナが終わつたらぶち殺してやる」

新人リンクスと言つていたストレイドを圧倒的な実力で潰し、アリーナが終わればこちらが奴をコケにしてやろう。

そう考えながらビルの屋上にトラセンドを移動させたダリオは、つぎの瞬間、その判断を誤つたことに気付く。

バシュー―――!! バシュー―――!!

「ツ?!ミサイルだとツ、クソがツ!ずっと近くにいたんじゃねえかツ!!」

地上からトラセンドのいるビルへ向かってくる2発のミサイルを回避するためにビルの屋上から地面へ落下する。

そしてトラセンドは地面との衝突を落下する直前にブースターを起動させることで速度を緩めて着地の衝撃を和らげた。

ドスン、と砂漠の地に足を着けたトラセンドは、先ほど回避したはずのミサイルが旋回しながら分裂したのを見て驚愕した

「なんだアレは……クソツ! M S M C の新型か!」

トラセンドに向かう計16発ほどのミサイル群は勢いよく加速しながらトラセンドへ迫り来る。

トラセンドが咄嗟にクイックブーストで避けた為に16発中4発が地面へ突き刺さり、6発がビルにぶつかって爆発する。トラセンド自体も1発は右腕に搭載した剣のような形状のレーザーライフルで撃ち落としたが、それ以外の5発がトラセンドの右腕を直撃する

「チツ!!」

ミサイルの直撃で受けた衝撃と機体の硬直に舌打ちをしてすぐさまクイックブーストを発動するトラセンド。

しかしそれをさせまいとビル群の中から一筋の影が迫つた  
「来たな、ストレイド……」

それは全身がF-1カーのように尖つた装甲に、全体的に黒く塗りつぶしたペイントの機体だった。

言うまでもなく、これがストレイドとやらの機体だろう

「死ね、クソガキ」

目の前に対峙した黒いネクスト、フルアリーヤフレームの機体へ右腕を向けてレーザーライフルの引き金を引くが、右腕のレーザーライフルの銃口からオレンジ色の閃光が迸ることはなかつた。

「なんだ、故障だと……？さつきのミサイルか」

見ればトラセンドの腕に装着したレーザーライフルは、その銃身を真ん中から折れ曲がり、レーザーライフルのマガジンからバチバチと火花が飛んでいる

「クソッ！ 使えねえッ！」

レーザーライフルを右腕を振りながらパージする。

それはトラセンドの近くのビルの壁へ深々と突き刺さり、数秒後に爆発した。

一方トラセンドはパージしたレーザーライフルの代わりに右の背中に搭載した汎用性の高さと瞬間火力がウリのローゼンタール製チエインガンを展開してやたらとク

「ハツ、どうしたクソガキイ!!」

腕を交錯させてコアを守るストレイド機をチエインガンで蜂の巣にしながらトラセンドは左腕の盾のようなレーザーブレードを展開する。

このままチエインガンの弾幕でストレイドを動けなくしてレーザーブレードで決めらる腹積りなのだろう。

そしてその思考の隙を、ストレイドは読んでいた

ドヒヤアツ!! ドガガツ!!

「何だとツ!! グアツ!!」

チエインガンの弾幕を物ともせずにクイックブーストでトラセンドの懷まで肉薄したストレイドは加速したままの状態でトラセンドのコアを思い切り蹴つた。

本来ネクストの戦闘では滅多に行われない肉弾戦、それを自身が身をもつて体感したこともあり、ダリオはトラセンドを動かすことが出来ずに数秒の間硬直する。

「俺が……この俺が、負けるだと……?」

目の前に映る竜殺しの剣、それをトラセンドの頭部パーツから見ていたダリオが呆然と呟く

「この俺が……こんな所で躓く……?」

ネクスト操るAMS適正があることが分かつた時からローゼンタールのリンクス候補として、ローゼンタール社の象徴というべきネクスト「ノブリス・オブリージュ」を驅るリンクス、レオハルトからネクスト機動を教わり、今、上へと登り続けるこの俺が

「ジエラルド……ジエンドリン……」

そして、ダリオの口から零れたのは、負け惜しみや戦いに足搔く言葉ではなかつた。それは、リンクス候補生の時代から争つていた、彼の最も気に食わない男の名前だつた

ジエラルド・ジエンドリン

俺と奴は真逆だ。そして、俺が唯一気に食わない野郎の名前だ

奴は貴族共の嫡男で、俺はドイツのスラムに住むしがない貧民のガキだつた。それもまあ、AMS適正なんてものが見つかつてからは然るべき地位に立つてゐるがなリンクスになつた俺はたかだかカラードランク11のリンクスなんぞに満足してい

ない。もつと、もつと上まで上り詰める…奴の所まで……！

……今思えば、奴はリンクス候補生の時から俺と競い合っていた。  
実力を言えば俺の方が断然強かつた。

ノブリス・オブリージュの扱いだつて俺の方が上手かつた筈だ  
……そして訪れた好機。リンクス戦争で負傷して引退したレオハルトに変わつ  
てノブリス・オブリージュのリンクスの座を奴と競い合つた……。  
最終成績は俺の勝ち越し。

10対8、明らかに俺が勝つていた。

シユミレーションでの作戦成功率だつて俺の方が勝つていた。

だが……老人共はAMS適正とたかが精神力如きで奴を選びやがつた。

そして俺にはノブリス・オブリージュの劣化版が渡された、だから俺はローゼンター  
ルの象徴ではなく、ただひたすらに上を目指すことにした……！  
それが奴との

「俺……は……!!」

ズシャアアアアアアアアアツツツツ!!!

## 『YOU LOOSE』

「やつた、たいちよーう！」

「ふう……やつぱシユミレーションだつたら勝てるな……」

カラードランク1-1のリンクス・ダリオ・エンピオとの勝負に勝つた俺は、ヴァーチャルシユミレーションでフル稼働させた頭をボーッとさせながら全身の力を抜く（にしても……クイックブーストを使いまくつたあとつて、身体が怠いな……覚えど）  
腕をぶらぶらせ、背中を猫背気味に曲げた俺は戦闘中でのクイックブースト連発は楽しいがそのあとが非常に身体が怠くなるという事を覚えた

「クソガツ!!」

ドガツ！……という何かが蹴飛ばされた音と、ダリオ・エンピオの怒声が近くから木靈した。見れば額に青筋立ててピクピクさせている。わお、すげえ器用  
「クソガキ！これで終わつたと思うなよ：勝つて勝つて最後に負ける……てめえも同じ

だ！ それまでせいぜい浮かれてろッ！」

ペツと痰と一緒に捨て台詞を吐いたダリオが不機嫌さを隠さずにズンズンと何処かへ姿を消した。

内心で「金払つて帰れよ」と思つたが口にはしなかつた

「やあ、君。ストレイド・君、だつたかな」

突然背後から声をかけられて驚く。ぱっと振り返ると、爽やかそうなイケメンフエイスの好青年が立っていた

「え……つと……？」

誰ですか？あんた？と、声には出さずとも怪訝そうな表情でイケメンを見ていると、

「俺の名前はジエラルド・ジエンドリン。ローゼンタールのリンクスだ」

「ダリオとの戦闘、すごかつたな。これからも頑張ってくれ」

さつきの戦闘を褒めてくれたジエラルドから、ポン、と軽く手渡されたカードを見て無数のはてなマークを頭に浮かべる。なんだこれ。

カードに電子文字が浮かんでるけどなんの数字？

「ああ、それかい？それはダリオに勝ったランカー戦の報酬とF P Sメモリだ。好きに使ってくれ。それじやあ」

手を軽く振つてジエラルドはダリオが姿を消した方向へ歩いて行つた。

「…………あれ、誰なんだぜい？」

「ランカー上位のリンクスだぜ…………」

「なるほど……強いのかー」

「ああ…………よくコジマで待ち伏せされるけどな」

「…………う？」

ジエラルド…………お前が悪いわけじゃないんだ。ただ、強いて言うなら敵相手に呑気に「ふらやましいよ」とか言つてオーバードブーストで突っ込んでくるとさあ、だいたいコジマで潰されるのが落ちなんだよ……ホラ、カーバルス占拠とかでもさ……  
「さあーて、金も貰つたし、とつとセレンと合流しようぜ」

あんまり待たせるとブチ切れるからな、あのババア…………怒らせるとすぐ拳骨が飛んでくるし…………

「おい」

「…………（おおつとお？既にお怒りモードじやね？ヤバくね？これ死ぬんじやね？」

「おい」

「…………な、何かなセレーネ」

ゴスツツ。セレンに返事を返したところでみぞおちに重い一撃を喰らつた。やばい死にそう。あ、まずつた。視界の向こうにガチでお花畠が見えるわ。これが死つてやつか…………ぐべし

「せ、セレン？あの、お金稼いだんでひとまず許して？」

「リンクスネームの登録も終えた。もうここに用はない、さつさと帰るぞ……」  
さげに鼻を鳴らす。そしてそのまま歩き出したのでベルと一緒にその後を追う  
そう言つて金とFPSメモリの入つた薄つぺらいカードを渡すと、セレンが面白くな

不機嫌そのままに言つたセレンにビビつてゐると、観客席に視線を感じて辺りを見回す。

……まあ、そこには他人の姿しかないわけで、見知った顔なんていらないのだけど

「あ！セレン、ちょっと待てよー！いいか!?その金、絶対アリーヤの内装に使えよ!?間違つても…………!!ちょ、待てってー!?」

無名リンクス 対 ローゼンタールのN o. 2

その対戦が終わつた後、観客先に残つている人の数はまばらであつた

「どうだつた？ 彼」

「別に、ただのリンクスつてだけね。ダリオ如きを倒したくらいいじや実力わかんないし」

紫色の髪を後ろでうなじが見えるように束ねている髪型の少女と、緑色の髪を背中の  
真ん中あたりまで伸ばしているワンドフルボディの少女が、先ほどの戦闘を見ながら感  
想を呟く

「…………それで、アイリスは…………その、いつまで私の胸を揉んでるの」

「ふふふ。メイの喘ぎ声、良かつたよ。周りの男なんて観戦そっちのけでメイを見てた  
し」

「も、もう！」

女の百合……といふかガチレズ思考によつて観戦中ずっと自分の胸を揉まれていた  
メイは、呆れながら息を吐いていつまでも胸にしがみつく彼女の両手を引き剥がす  
「ああ、つれないね。この後ホテルのベット辺りに洒落込もうと思つたんだけど」

女のレズ発言にAMSとは別に頭が痛くなつてくる感覚を感じたメイという女性は、もう一度ため息を吐いてストライドが使つていたミサイルの画像を眺める。

そこにはもちろんGA系列の武器を扱う彼に親近感を覚えたのと、これを機に彼をGAに結びつかせられるかもしない、という思惑があつたからだ。

そしてそれをなんともつまらない表情で紫髪の女が見ていた。

「…………やつぱり、アレもイレギュラーかしら。そうなると、邪魔ね」

ボソッと呟いた女の顔は、とても無表情な、能面の如し冷徹な顔だった

「やはりあのリンクスは甘い男のようです。ならば、貴女の敵ではありません。フェリチタ」

「…………」

黒縁メガネを掛けた黒スーツの女性が、眼鏡の縁を押し上げながら傍の少女に断言する。

その少女はといふと、手に持つた端末に映る黒いネクスト　　シユヴァルツセイバー

“をジッと見つめていた

「ストライド…………」

黒いF-1カーのようなボディを持つネクスト。そしてその機体のパイロットの名前を呟いた少女は、ボサボサとした黒い髪の向こうに潜む赤い目を細めた  
「どうしたのです？まさか、また過去のイレギュラー達が？」

少女の異変に気付いた女性が尋ねるが、少女はふるふるとそれを否定して端末にダウントロードされた先ほどの戦闘ログを見る

『ズシャアアアアアアアアアツ!!ガガガツ!!ドドドドドドドツツツ!!ズ  
シヤアアアアズシャアアアアアアアアツ!!』

流れたのは一際大きい噴射炎と共にネクスト トランセンドに足蹴りをかまし、動けない敵機の腕をレーザーブレードで斬り払い、右手に持ったアサルトライフルを横薙ぎに振るう黒いネクストの無茶苦茶な白兵戦だった

「ストライドというリンクスが行つた敵機の部位破壊が有効だということは認めましょう。しかし、敵機の動きが止まつたチャンスにコアを狙わないのはどういう事でしょう

か

「私じゃ、分からない」

「そうですか。どうやら主任の方も用事が終わつたようです。それでは帰還しましょ

う

さながらコンピュータのような抑揚のない平坦な声で告げた女性が、ハイヒールの踵を鳴らせて観客席を去る。そして、少女もまた、自分の寝床へ帰るために女性の後をついていく。

———壊せ 壊せ 秩序を壊せ 自らの羽を縛る鎖を 自らが神と自称する管理者を 数多に存在する敵を 自身を裏切る者も全て 破壊しろ 自由への邪魔をする者は全て———焼き尽くせ

「秩序を壊すしか出来ない私達には、分からぬ」

彼女の脳裏に響く何重もの声は、1人の少女を、一個のイレギュラーへと仕立てていく。

彼らが辿る道は一様に、一つの秩序の破滅と、自らの自由を手にするための破壊である。

ソレらに取り憑かれた少女もまた例外ではなく。

彼女もまた、企業の定めた秩序を、如何に破壊せんとしていた。

秩序を壊す純粹なイレギュラーが、予測不能なイレギュラーと交わる時。その未来は、果たしてどのように修正されるのか…………。

# ラインアーケ襲撃？

『ミッショントーーー「ピツ』』

「ベルー、ゲームしよーぜー。これこれ、戦略ゲーム『弱王の野望』だつてさ」「あー、それ？ 戦略ゲームつてゆーより育成い？ かなあ？ 攻略見てやつた方がいーよー。」

「98%ゲイヴンルートになるから」

「なんだよそれ！？ クソゲージやねーか！ フアツク！ あのクソツタレゲーム屋、俺を騙しやがつたなああ！！」

「うひひ、たいちよーつてば騙されてやんの、やーいやーい」

「いやお前もクリアしてるんなら騙された仲間だろ？」

狭い一室、真っ白に塗られた壁と、一段ベット、真ん中にテーブルとソファーがあり、テーブルの向こうには40cm程のTVがある。

ここは俺ことストレイドの部屋で、中には部屋主の俺とベルリオーズの娘、ベルがソファーに座っていた。

そして、TV画面には先程まで企業連から届いた俺宛の依頼が届いていたので鑑賞していた。

……そう、ACfA最初のミッショーン、ラインアーチ襲撃だ。

ラインアーチの守護神 ホワイト・グリントが金稼ぎで仕事に行っている間、ラインアーチを守っているノーマルACとMT少数の防衛戦力との多対一のイージーミッションだが、代わりに報酬金が安い。

まあ、ホワイト・グリントがいない間について制限があるからまるつきしイージーって訳じやねえよ？アレが帰つて来たら俺のネクスト構成じやボコボコにされてジ・エンドだし。

つまりだ、怖いマツポさんが帰つて来る前に人の家を荒らしてこいつて事。  
ノーマルACに対して俺が戦力になるのか、っていう試金石とラインアーチ（アナトリアの傭兵とファイオナ・イエルネフェルト）に対するちよつかいを吹つかけようつて訳だね。

まあ、それも分かりきった事なんで今更腹黒糞女の依頼内容を聞くとか冗談じやねえーー！って訳で即消して先日カラードに行つた時に買った「弱王の野望 最終章」をベルとやることにしたのだ。

しかし、ベルから聞かされたのは「弱王の野望」が糞ゲーってレビュー、これには俺もテンションだだ下がりだわ。

仕方ないねえ、こうなつたらダムさんの部屋を探つてた時に見つけたアニメ映画（1

8禁&ノン・禁)「IGEDOー外道戦記」でも観るか、アクアビットクエストの続きを進めるか、AMIDAモンスターしかないな。

「ダムさんの部屋で見つけた「IGEDOー外道戦記」ってどんな内容だろうな?じゅ、18禁つて書いてたし……「ノン・禁」?つてのは掠れてて読めなかつたけど……」「アクアビットクエストどこまで行つてたつけ?確か、アリヤー姫がか弱い人質と思つてたら月光一文字でダンボール将軍を一刀☆両断したここまでだつたよね!」

「アミモンはアミバがようやく変装を覚えたからなあ。あいつ、どうやれば『ヤブ医者』からクラスチェンジするんだ?ジャギはもう『俺の名を言つてみろ!』コンボを覚えたのに」

この世界の高性能小型ゲーム端末を手に取り早速ゲームを始めることとする。

「…………おい、ブリーフィングは見たか?」

…………が、頭を掴んだ悪鬼の力の前にそつと端末の電源を落とした。

「ハイ、チャントミマシタ(んなわけねーじやんラインアーケ襲撃とかゲームで何回聴いたと思ってんの!?アーホアーホ!ババアーババアー!)」

「ほう?なら内容を言つてみろ」

「えーと、ホワイト・グリントがラインアーケを離れてる間にラインアーケを襲撃、ノーマルACとMT部隊を壊滅しろだよね」

一  
ほ  
お  
う?  
二

なんだか邪悪な笑みを浮かべたセレンはＴＶの電源を付けて依頼メールを再生した。

『企業連：ホワイト・グリントの足止め』

「ん？」

え？

「は？え？え？何これ？俺、知らない。俺知らないよおおおおおこんなミツショソン！」

はあ!? ホワイット・グリントの足止め!? 意味分かんねえよ！ バツカジやねえの!? 実戦経験もない新人リンクスにこんなことさせんのか!? はあああ！！！

「やはり見ていいなかつたか、このバカは！」

ドゴつと頭を殴られるがそんなのは今の俺的に関係ねえ。

なんだよこの任務、自殺志願者向けの任務だろ、AMIDAと戯れるドミナント連れてこいよ俺はただのアリーヤヒヤツハー粗製リンクスだぞ今のアリーヤ構成と練度で勝てるわけねえじやん。

「お前と同時期にリンクス登録した奴がいる。そいつの援護と、万が一ホワイト・グリン

トが帰ってきた時はお前が奴を喰い止める。それが今回の依頼だ。簡単だろう?」

あかん、この人ほんまもんのバカや。

アナトリアの傭兵に初期アリーヤで勝てるわけねえだろ考え方直せババア。

……しかし、俺と同時期にリンクスが? これも原作が崩壊してる?

「どつどと準備しろ。BFFが偽の依頼でホワイト・グリントを誘き寄せてるうちに行つて片付けばそれで済むだけの依頼だ」

BFF? 偽の依頼? リリウムたんじやねーか! ならカラード総出で「貴方には此処で果てて頂きます。理由はお分かりですね?」ルート行けよ! そのまま! これじやあもし  
かしたらホワイト・グリントが帰つてきやうかもしけねえだろ! バカ!

「ま、待て……お、俺の試金石とするにはちよ、ちよこつと簡単過ぎるつしょ? だから企業連の連中も俺とセレンを侮る傾向にあると思うんだよね。だ、だから、その一、今回は見送つて貰うつてことで……」

「ダメだ。今すぐ準備しろ。傭兵として活動を始めるにあたつて此処も出る。カラード近くのスラムに事務所もガレージも用意した。今後はそこを使う」

そ、そんな――!

酷い話だ。

ウォーミングアップにもならない簡単なお仕事でドラゴンスレイヤー縛りの「修理費

0」「弾薬費0」のパーエクトS確でセレンとベルの奴に俺の事を見直させてリリウムたんが俺の事を気になるフラグを立てようと思つたのに……よりによつて原作ブレイクの上にホワイト・グリントと対戦するかもフラグだと?冗談じやねえよ……。

そんな俺の心の叫びも呆気なく無視されて、旧レイナード本社 エグザウイル地下のセレンアジトからカラード近くの独立傭兵としての事務者に引越しした俺は、新人リンクスと共にラインアーヴ襲撃を決行することになった。

「…………はああ」

溜息をつく、場所はNEX Tシユヴァルツセイバーのコックピット。

既にシユヴァルツセイバーとの精神同一化も終えて、現在はAMSシステムによる微調整を待つてゐるだけの状態だ。

因みにそのシユヴァルツセイバーがいるのは傭兵事務所の格納庫ではなく、セレンが所有するNEXT専用の大型輸送ヘリの中で、

『準備は出来てるか。すぐに射出する。…………落ちるなよ』

今輸送ヘリが来ているのは件のラインアーヴの橋でして…………。

「うじうじしても仕方ねえか?…………同業者は」

はあ、ともう1つ溜息をついて俺と同じ新人リンクスの事を聞く。

『機の隣についている。あつちは逆関節のアリシア機を使うようだ』

アリシア……頭、コア、腕がアリーヤパーティで脚部だけが逆関節パーティの旧レイレンードの逆関節機だ。

AC4、fA共に使うリンクスは1人ずつしかいないが、AC4ではザンニというリンクスの「ラフカット」が強過ぎる事で有名なNEXTだ。

fA? 最弱団長なんて知らんがな。

なにより逆関節機は縦方向への出力が半端ないからノーマルACやMTじやその機動性についていくことは出来ないだろう。  
つくづく俺が出るまでもない依頼だ。

……最初はフラグ立ったか? って思つたけど別にそうでもなかつたのかな? よく考えればアリシア機が頑張るだけで俺はタダで報酬金貰えるわけだし。

『NEXT名は『スカベンジャー』…フン。悪趣味な奴らめ』

スカベンジャー? スカベンジャーか、確かにそういうの、ACVで出て来たよね。

ACfAで慣れた挙動がACVじやスッゲー操作に戸惑つたんで最初ボコボコにされたの覚えてるわー。

『ふーん。一応あつちに回線繋いでさ。『早く終わるように頑張ろう』って送つといて』  
『…………ああ、分かった』

セレンの返答に満足しつつ、無機質なコックピットから意識を離すことにする。

……いや、正確には違う。

正確には俺が座っている椅子についてるヘルメットを被り、そのまま精神同一の完了したシステムに従つてNEX TとAMS接続をするのだ。

まあ、簡単に言えば、だ。

本格的に説明しようにも俺はそこんとこ分からん、俺はゲーマーなだけで理系じやないからな、寧ろ文系。

さてさて、そんなことよりAMS接続だ。

何も気難しいことを考へるわけじゃない。

ただ、ヘルメットの中で操作される催眠音波を聞いて寝るか、もしもの場合は付属しての注射器で眠り薬を投入して意識を無くせば良い。

その後は事前に接続してるAMSシステムが自動的に俺の意識をNEX T自体に憑依?させてくれる。

……それが、リンクスとNEX Tの概念?だ。

難しいことは分からん。

『そんでもあ、これで一丁上がりつてね?準備はできた。あつちは?』

すぐに眠つた俺の意識はそのままAMSシステムに馴染み、俺の視点はAMSシステ

ムを通して輸送ヘリに入っているアリーヤ自身のものになる。

ヘリ内部に掛けられているマークのグリップを握り、格納スペースに詰められるだけマガジンをセットする。アリーヤの複眼がマークへ視線を向けると視界の隅っこにマークの損傷状態、弾数などが記載される。

故障は無し、安全に稼働、それは左手のドラゴンスレイヤーも、背中の軽量型プラズマキヤノンも一緒。

ミッショーンの開始時間は後3分を切つていて、視界の左上にはマップが、そこには光点が当然あって、俺を示す矢印と、味方を示す緑色の点が。

（スカベンジャー……か。アリシア機体に武装は空中戦ライフルに機動戦ザライ、背中に近接レーダーとチエインガン。オーメル陣営系の武装構成で火力はしょっぱい。まあ、削り特化かね）

今回の相棒となるNEXTスカベンジャーの情報を見る、続いてリンクスを。

（無愛想な顔が仮面にして可愛くねー。目の下に隈があるし……しつかしもつとマシな画像はなかつたのか？睨んでる女怖えー）

リンクス名は：フェリチタ。

女だが、手入れもろくにしてないボサボサの髪型、まず可愛げのない表情が目を惹く。

そして次にギロリとこちらを射抜くような両目が飛び込む。

この写真を見れば10人中10人が小汚い娘だ、とでも言うだろう。

それが俺の、フェリチタというリンクスに対する印象だった。

『あつちが先行するんだろ！セレン！俺はどうする？』

『援護をしてもしなくて報酬金は貰えるんだ。……傭兵なら楽して稼ぐことを考えろ』

へいへい、つまり実力を隠すために黙つて見てろつて訳ね。

輸送ヘリのハツチから頭部ヘッドパーツを出して周囲を確認する。

橋部分を目を凝らすように意識すると見たい部分をAMSシステムを介してズームインしてくれる。

どうやら、敵の防衛部隊は此方を迎撃つ準備が出来てるようだ。

『……』

暗い赤色のアリシアーナ『スカベンジャー』がヘリから降下して橋に降り立つと、すぐ様縦方向ヘジヤンプしてノーマルACの照準を外す。

スカベンジャーが居た場所にはAC達のライフル弾が通り過ぎていく、今度はスカベンジャーの番だ。

『ぐああつ!!』

『ふ、プライマルアーマーだ！先ずはプライマルアーマーを——』

空中へ跳ねながら右手に持った空中戦ライフルでノーマルACが密集する地点を大雑把に撃ちまくり、次いで精密な狙撃を機動戦ライフルで行う。

成る程、リンクス本人の射撃精度は中々のものだ、上空からの狙撃を嫌つてノーマルAC達は橋にあるトンネル？部分へ姿を隠す。

——しかし、それは悪手だ。

旧レイナード逆関節標準機のアリシアの特徴は、逆関節脚部を用いた上下運動の錯乱やロツクオン外しだが、元々レイナードの機体はどれもこれもが高機動高出力機、地上でも空でもビュンビュン飛び回る（その為EN切れにもなりやすい）。

そして、スカベンジャーの武装構成は張り付き、瞬間火力と手数で削つていくスタイルだ。

むざむざ狭い場所にいる敵を瞬殺するのは造作もないだろう。

現にトンネルに機体を隠したノーマルAC達はクイックブーストの連発でトンネルの中に突っ込んだスカベンジャーのローゼンタール製チエインガンと空中戦ライフルによつて瞬時に屑の鉄塊へと姿を変えた。

『動きは良いけどちょっと強引じゃね？』

『相手がノーマルならこれが普通だ』

いやいや、もつとスマートに、俺だつたらそうだねえ、マーヴをノーマルACに突き刺して盾にしつつド拉斯レで盾もろとも切り刻む。

そこ、鬼畜だとかお前のやり方も強引じやねえか！とか言わない。

(そんなこと考えてるうちに、もう最後のノーマルACも倒したな)

最後の一機を橋の上から蹴飛ばして海の中へ蹴り捨てたスカベンジャードが動きを止める。

『セレン、任務終了だろ？』

けつぎよく戦わなくてラツキーだつたのか、折角の実戦を体験できなかつたのが残念だつたかよく分からんが、まあ、今回は恵まれた方なんだろ。

そう納得してAMSシステムの接続を切ろうとすると、セレンから通信が入る。

『いや待て、企業連から通達だ。……それと、レーダーに捉えた。敵ノーマルAC部隊が此方へ急行中——！なんだ……？ストライド、高速で此方へ飛んでくる熱源反応を確認……!!これは……NEXTホワイト・グリントだ！準備しろ、来るぞ!!』

おいおい、マジかよ、マジで帰つて来ちやつたよアナトリアの傭兵エ。

ちつ、んなら先ずは輸送ヘリから距離を取らないとセレンが死ぬかも。

『ホワイト・グリント オペレーター。ファイオナ・イエルネフェルトです。貴方方は既にラインアーケの領域を侵害して居ます。速やかに退去して下さい。でなければ実力で

排除します』

遠くに大きな光が見える、O Bの噴射光だ。

輸送ヘリから離れてマーヴのグリップを強く握りしめる。

武器はマーヴ、ドラスレ、軽プラズマキヤ。

『死ぬ気で生き残ろう……』  
厳しいが、俺の役目はあくまでもA C部隊撃破までのホワイト・グリントの足止め。

さつさと終わらせろよ、スカベンジャー。